

T 02
N 69
51

日本における統計学の発展

第 51 卷

話 し 手	大	橋	隆	憲
聞 き 手	野	村	良	樹
	浦	田	昌	計
	吉	田		忠
	奈	倉	道	隆
	五	十 嵐	光	男
	川	口	清	史
	野	沢	正	徳
	泉		弘	志
	木	下		滋



1982年9月23日(木)

大 橋 宅 に て

10/12
26039

26039

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

野村 それでは、始めさせていただきます。

大阪市立大学の野村でございます。

これは、文部省の科学研究費の総合研究で、「日本の統計学の発展」という大きなプロジェクトの作業の一環でありまして、大橋隆憲先生に、「日本の統計学の発展と私」ということを、できるだけ詳しくお聞きしようというのが、きょうの趣旨でございます。

質問のポイントは、皆様方に前にお渡しいたしましたので、その順序によって進めたいと思います。また、これは先生のご希望で順序が少し変わる場合もあるかと思いますが、大体たてまえとして、4つのパートに分けていろいろお話を伺おうということでございます。

まず第1のパートは、戦前の学生時代から、京都大学の助手を経て、戦後、日本鋼管にお入りになり、京都大学へ復職なさった前後の時期、それから、経済統計研究会が創設されました当時のお話、初期の活動の状態についての問題を中心にお話を伺っていきたいと思います。

主にお尋ねする方は、岡山大学の浦田さんをお願いしたいと思います。皆様方、そのときどきのポイントにお気づきになれば、ご自由にお聞きいただいて結構でございます。

では、どうぞよろしくお願いいたします。

浦田 僭越ですが、最初に質問させていただきます。

私も先生を存じ上げているのはごくわずかな時期で、戦前、戦後ということになりますと大変疎いんですけれども、皆様に助けていただきたいと思います。最初の時期は戦前と戦後に分けられると思いますが、戦前の時期

でも、先生が東京大学文学部で宗教社会学をなさった時代、それから京都大学へ来られた時代があると思うのです。われわれの関心からいえば、先生が社会科学に入られたころの問題意識ないしは状況、先生が京大へ来られるようになったいきさつ、統計学を考えられたいきさつを話していただければと思います。ただ、その背景にいろいろな時代の流れ、運動があったと思いますので、ご自由に先生の思い出を話していただきたいと思います。

大橋 初めに、一応全体について、ごく簡単に紹介しておきます。

というのは、今度京大に出版会ができたんですね。そのとき、『私の戦争体験記』というのを出してくれと頼まれて、出した原稿があるのです。それが大体私の一生について、全体をごく簡単にまとめてある。それを見てもらえばいいわけだけれども、一応申し上げます。

僕の一生を顧みると、ずっと続いているのは大体反戦運動なんだね。そこで、反戦運動の歴史を本当はまとめておけば一番いいんだけど、どうもできそうもない。

一番初めの問題は、秋田雨雀の日記が全部そろっているし、自伝もあるんだけど、秋田雨雀の日記の1923年10月18日の項目があるのです。そこに「自然ひとを殺し、人ひとを殺す、ぬはたまの、この短夜の夢醒むる日よ」という歌があるのです。この歌は、雨雀が、この日、黎明会の人々と一緒に「虐殺」という題で歌の会を開いた、そのときうたった歌で、その掛け物が僕のところにある。秋田雨雀が讃を書いて、柳瀬正夢が秋田雨雀の漫画を描いたやつだ。ことし、雨雀の生誕100年記念に当たるのですが、秋田雨雀と土方与志が東京でやっている

青年劇場というのがある。ここでその会を開いたとき、その会に出した歌なんです。こういうふうには、秋田雨雀の影響が、考えてみるとかなり強くあるわけだ。それで、秋田雨雀が出てくるのは、僕の場合、結局戦争体験といっているかと思うんだ。戦争体験といったら、僕の場合、「聞けわだつみの声・日本戦没学生の手記」の人たちのように、死に直面しているわけじゃないんだ。そういう点で、非常にのんきな戦争体験なんだ。

それにしても、1923年（大正12年）9月1日の関東大震災のときの記憶が、現在でも非常に鮮明なんだ。これはどうしてかということ、おやじが朝鮮人を弁護したんだな。あのころ、朝鮮人が毒を池に投げ込むということを意識的に宣伝したんだね。それが、新潟の田舎に引っ込んでいたときなんだけれども、ああいうところまで在郷軍人に命令して、反朝鮮というか、そういうあれをやっていたわけだね。おやじが、「朝鮮人だってそんなバカなことしっこないだろう」といっただけで、在郷軍人会に竹やりで包囲されて、おどかされて、僕たちは分離され、おやじはつるし上げを食っていた。そういう状況がまだ記憶に残っているんです。

それで、そのころから反軍の感情があるし、社会主義者への同情というか、そのとき大杉栄が殺されている。そういうので、まだ小学校のころだと思うけれども、反軍の感情と社会主義という意識があって、それがずっと最後までまだ残っているんじゃないかと思う。そういう形で、一番初めの関東大震災の問題が、僕には影響しているようです。

結局、戦前は東京で過ごしたし、戦後は京都で送った

わけだけれども、どっちにしてもあまり勉強したわけじゃないのです。戦前の時代は、旧制浦和高等学校後半の時代という、昭和4～5年、これはほとんど全国農民組合の埼玉県連の仕事をしているわけです。ここの書記長が、渋谷定輔¹といって、「野良に叫ぶ」という詩を出している。日本農民詩集の中に出ている。あの人が書記長で、書記の人や僕たちが手伝って、農村調査や宣伝活動の仕事をしているわけです。その高等学校のとき、秋田雨雀が埼玉県連へも来たわけだけれども、そういう関係で秋田雨雀のやっていた戦闘的無神論者同盟——その前に反宗教闘争同盟というのがあった。その仕事を手伝ったりして、高等学校を卒業して、埼玉県連をやめて、試験場はもう特高が来ているに決まっているので、試験を受けずに、そういう無神論者同盟なんかの仕事をやっていたわけです。

その後、宗教学を智山専門学校で1年やって、それから東大文学部の宗教学科に行ったわけだけれども、東大に行ったときは、ほとんど街頭運動というよりも、街頭の連絡活動だけが中心で、勉強はしていない。卒業してから、大学院に2年行ったけれども、街頭運動ばかりだった。

そのころ、知らなかったんだけれども、矢吹慶輝という日本の社会事業の大先輩が宗教学の三階教の研究者だったんだけれども、それがチベット語を担当していて、チベット語を教わった。矢吹慶輝は仏教社会事業関係の人で有名だったんだけれども、そういう社会事業をやっていることは全然知らなかったんだ。チベット語の教師だと思っていたら、そういう仕事をちゃんとやっている。

社会事業史の吉田久一なんか、矢吹慶輝の最後のお弟子さんだそうです。

そんな関係で矢吹慶輝さんは、仏教関係の社会事業史をずっとやっていたんだけど、僕はその反対の戦闘的無神論者同盟の仕事をやっている。そういうことで、意識的ではなかったんだけど、偶然にそういう関係になっていった。そんなことをいま覚えているわけです。

東京にいる間はそんなことで、京都へは勉強するつもりで来たんだけど、結局、東京で治安維持法違反容疑で引っかかって、三田署で、未成年者で起訴留保されたんだが、そういう時期があったものだから、京都へ勉強するつもりで来たのに、特高の監視が相当きつくて、あまり人様に迷惑をかけると悪いと思って、ほとんど何もしていないんだけど、特高としては、反戦思想を持ちながら外面合法的に活動しているのはかえって悪質だという考えを持っているわけです。それでしょっちゅうつけていたらしいんだ。

結局、昭和15年の3月、京都大学を卒業してすぐ、経済学部の助手になったんですけど、1年たたないうちに検挙され、川端署に回されたとき、日高第四郎という、その後文部次官をやった人が来て、辞表を書かせた。その前に特高から、京大へ辞表を出すか、それとも山科（刑務所）へ行くか、どっちか選べといわれた。そういうむちゃな選択に迫られているところに、日高第四郎が辞表を書けといってきたので、辞表を書いて出した。それで学校をやめたんです。

そのころの記録が学校にどんなふうに残っているかと思って、議事録を調べたんだけど、退職してその次

の人事ということで、全然触れてないですね。本当に形式的なことだけ。普通の退職で、普通の後任人事という形で議事が進められているんです。

そういう形で、京大の助手を1年足らずでやめました。そのころの記録は『特高時報』にあります。これは、学生運動で、昭和16年1月、坂寄俊雄、故吉村達次、渡部徹、朝山文三など、学生が19名逮捕されたことが載っている。それから、3月の『特高時報』にも、僕や上杉正一郎君などや、理学部の人が載っているわけです。それはほとんど知らないけれども、「聞けわだつみの……」の中にちょっと出ている永田（和生）君だの大野（圭吉）君らの事件で、結局そのしっぽを僕のところに持ってきたみたいなかっこうで、僕が東京と京都を連絡しているんだらうという容疑ですね。もう一つは、蜷川さんが相当ねられて、その材料を取ろうとしていた。そのことは、内海庫一郎さんもちょうと書いているようだけれども、そういう形で学校をやめたんです。

それから、知恩院の華頂高等女学校に勤めた。そうしたら、すぐ特高が来て校長にねじ込んだ。校長の方じゃ、教育のことはこっちがやるんで、特高の指図は受けないといっってはね返してくれて、何ともなかったけれども、いつまでも迷惑はかけられないんでそこをやめた。そして東京へまた出たわけです。

東京では協調会に入る話があって、協調会では、昭和17年、まだ戦争中だったけれども、戦後の賃金問題を担当しないかといわれた。しかし、しよっちゃう特高が来ているものですから、それを担当したらまた迷惑が大きくなるので、それは引き受けなかったのです。それで、

会社なら問題がないだろうということで、日本鋼管に入り、会計課で銭勘定をして戦後になったというのが経過です。

戦後は、日本鋼管本社の労働組合委員長をやらされたわけですが、あとは、大岡山の東京工業大学の統計学担当で3年ほどおって、京都に来ないかというのが京都へ来たわけです。

戦後社会の特質は、やっぱり非常に矛盾に満ちたもので、核戦争の可能性があるということが前提になっているんで、核戦争の現実なんか考えたら戦後計画は成り立たない、そういった社会を否定するような根本を持ちながら、その上に立っている計画の立たない社会である。これは、戦前の社会と戦後の社会は全然違った性格を持っていると考えているわけです。それで、反核、反戦の活動は絶対に必要な運動だと思っているんで、そういうのをまとめられるといいなと思ったけれども、時間がないので、まとめることはなさそうだけれども、できたら反戦運動の歴史をまとめられたら一番いいと思っているわけです。以上が大体のところですよ。

浦田 いまの先生のお話、戦前、戦後というよりも、全体を通じての先生の歩みを教えていただいたと思うんですが、戦前期に続いて、戦後の時期のところをもう少しよろしいでしょうか。

先生の場合、あまり勉強しなかったとおっしゃったんですけれども、われわれも具体的なことはよくわかりませんが、先生の著作目録などを見ますと、宗教社会史のような研究をなさっていて、その方の蓄積を持っておら

れる。そういう仕事を、戦後も若干引き続いてやっておられるように思うんですが、その仕事と、蜷川ゼミに入られたこととは、統計学という意味では何か直接ご関係があったんでしょうか。

大橋 それは、宗教哲学と宗教社会史なんだけれども、哲学やっていたんだ。いまでもヘーゲルはわりあいに関心があるわけですが、ヘーゲルからフョイエルバッハ、マルクス、思想的にはかなりつながっているし、それから学問としても、本当は宗教批判というのは経済学なんだ。大体そういう考え方を持っていたんで、時間があつたらマルクス主義経済学をきちっとやっておきたいと思っていたんだ。

その前に大学院のとき、曹洞宗の寺院経済調査というのを、越智道順という人と一緒にやっている。それは、宗教学の場合、経済学よりもっと民俗学的な調査、実証的な研究はかなり進んでいるんで、方法論としては、抽象的な方法だけでなく、むしろそういう点では、宗教学なんかの方が社会科学としては進んでいたんじゃないかなと思っていたんだ。そういう宗教調査の仕事をやっている。

それから、マルクス主義の社会の基本をやりたいということと、その前に河上肇さんがいたもので、河上さんの後、京大の方がしっかりしているだろうと思って、京都へ来たんだ。これはやっぱり、河上さんもあれだけれども、矢内原忠雄さんの方が、戦争中最後まできちっとしていたな。その点では、京都へ来てちょっとがっかりしたという感じを持つんだね。

矢内原さんにしても、宗教学の石橋さんにしても、教

室に軍の連中が来ていても、それをちゃんと批判していくという態度を崩さなかった。京都へ来たら、そういうことは全然やらないんだな。蜷川先生は、教室でもわりあい批判みたいなことはやっていましたけれども。東京の場合は、皆さん教室で堂々と最後までやっているという態度を貫いていたね。その点では、京都では、僕は戦時における教師の態度でちょっとがっかりした。

とにかく河上さんのあれがまだ残っているだろうと思ったことと、もう一つは、蜷川さんの統計学、有沢広巳さんはたしかあのときもうがたがたしていたから、そういう形で、やっぱり統計学はもう岩波の概論だの出たんで、統計学でも一番ちゃんとしているということでも京都へ来たわけです。

京都へ来るときは、東京商大の大塚金之助さんは反対したんだ。宗教をもうちょっとちゃんと東京で頑張ってるやっぴろといっていたんだけれども、最後には賛成して、こういうことをやったらいいんじゃないかということとで、ダニレフスキーのマタレーダの、技術論を教えてくれたりした。そういうことで京都へやってきたんです。

浦田 京大時代、京都で助手になられた時代のことでもうちょっと伺いたいのですが、戦前の雰囲気はそういうことだったんでしょうけれども、先生はマイヤー研究をおやりになった。マイヤーをやられるについては、何かいきさつがあったんでしょうか。

大橋 マイヤーは、あのころ社会統計学としては基本的なものだったんだね。高野岩三郎さんも、財部静治さんも、藤本幸太郎さんもやっているし、蜷川さんがマイヤーの本をくれたんだな、これをやらないかということとで、

結局、僕は文乙だから、ドイツ語がわりあいによくできていたものだから、一番適当なんじゃないかということで、マイヤーの勉強を基礎的にやろうと思っていたわけです。

浦田 ゼミナールで、内海先生なども最初はおられたんでしょうか。

大橋 内海庫一郎さんは、建国大学に行っていていなくて、休みにこっちに内地留学で来ていたことが多かった。

浦田 上杉正一郎さんなんかとは……？

大橋 上杉さんが僕の1年上。

浦田 演習で、マイヤーについて議論するということにはなかったですか。

大橋 マイヤーは、主として僕が担当して議論したことがあった。上杉君あたりのときの名簿が全部あるんだな。あのころの研究題目がどこかそこらに入っているんだ。それが見つかったら出しますけれども、何しろ本がこんな状態で全部倉庫の中に詰め込んである。あとは花園大学に行っている。この倉庫の中で、どこにどう入っているのかわからない。整理するのに時間がかかって、とてもとても……。

浦田 いろいろお聞きしたいことがあるのですが、時間の関係で少し先に進みます。

終戦後、日本綱管での組合活動、最後は首切り反対運動、それから東工大に行かれて、京大に戻られるのですが、けれども、そのころ先生がお書きになったものを見ますと、国民経済研究協会との接触がわりあいにおありになるように思いますが、戦後、サンプリング研究というか、

批判を含めて、戦後の統計学の方たちが集まられて新しい研究を始められるいきさつを少し話していただければ……。

大橋 国民経済で「サンプリング」の研究会をやっていたわけですね。そこへ内海さんが帰ってきたりなんかして、「サンプリング」の研究会をやった。

浦田 先生はそこのメンバーなんですか。

大橋 メンバーみたいなものだね。稲葉秀三があそここのキャンプをやっていて、あのころは、メンバーとって、とにかく一緒に集まって、そこを根拠地にしてみんな議論したりしていた。給料をもらっているわけじゃないけれども、そのいろいろな仕事をしているという形。

浦田 でも、かなりたくさんの方が、だんだん参加されたんですか。

大橋 いや、そう大ぜいじゃないです。

浦田 経統研とのつながりは、まだあまり考えられないわけですか。

大橋 まだまだですね。そこで、国民経済研究協会で「経済統計」というかり版のシリーズを出していた。そこでいろいろ書かされたりなんかしていたわけですね。

浦田 あれを見ますと、経済表についての論文を出されていた。「要保護者の実態」というのをお書きになった。これは実態調査でしょうか。あの「要保護者」の正式な名前は何というんですか。

大橋 今度、産業統計研究社の中島さんがゼロックスとってくれたんですが、「飢餓線上の生活実態」(「国民経済」昭和23年11月号)、これが、社会福祉について戦後すぐに

書いたものです。憲法（25条）を福祉の原理論とすると
いう押さえ方をしている。それから、生活保護法だのあ
あいうやつを各論の形でとらえて、全体をまとめようと
していたわけです。ここは生活保護の話が中心なんです。
これには、当時出ていた社会福祉関係の統計資料は、一
応できる限り集めたというか、その抜粋をやっている。
それを基礎にして、国民経済で裏へ統計表をつけてくれ
て、その解説をしたという形のものでした。「飢餓線上
の生活実態—要保護者の場合—」。

浦田 先生のお仕事の中の1つのラインがそれだと思っ
てすけれども。

大橋 ここで立っているんだけれども、これもこれっき
りで、社会福祉関係の方はとだえちゃったのね。

このとき何か社会福祉関係の学校からちょっと話があ
ったけれども、東京工業大学と一橋と両方から話があっ
て、工業大学に行った。一橋の方は、山中篤太郎君が来
ないかといってくれていた。

浦田 「8000万人」の論文は、後で、吉田さんの第2段
のところでまた話が出ると思うんですけれども、サンプ
リング研究会や、近代経済学、推測統計学批判を始めら
れる雰囲気はどの部分で——もちろん、個人個人は意識
されていたんでしょうが、そういう雰囲気は……？

大橋 それは、戦争中だけれども、統計学のテキストを
つくる場合、ソビエトの教科書批評がある。

野村 ホチムスキーの「統計学教程批判」。

大橋 「ソ連統計彙報」が、1941年4月、外務省で翻訳
して「大日本帝国政府」の用紙にタイプ印刷されて、若
干の統計研究者に配付された。大阪の連中はそれを手に

入れて、こんなところまで来ているとって、感心したことがある。それは、ネムチノフの「統計教育についての報告要旨」と、マルイシェフの「統計戦線について」の2つの論文ですが、小島勝治の蔵本の中から出てきた。それを岐阜の藪内さんにあげたんだ。

浦田 翻訳そのものは戦争中にされているんですね。

大橋 はい。

浦田 小島勝治が手に入れたというのはそのころですね。

大橋 はい。

浦田 そういうものが、先生の方にはどういふふうに…

大橋 それが大体似ていた。その批判の観点というのは、社会統計というか、唯物弁証法とつながって統計学を考えられた場合、そういうソビエト式の行き方をするのが論理的には合っているわけね。それが論理的なものだから、僕の方としては、それをとるべきだということだった。

そして、研究会で、そんなことをいったって、サンプリングをちゃんとしておかなければ批評にもならないからとって、サンプリング研究会でアメリカのやつを訳したり、いろいろなことをしていたわけです。

浦田 それで、内海先生が、大橋先生と一緒に何かの講座か講義を聞きに行つてつまらなかったという話をされたことがあるのです。

大橋 あれは物理学。

浦田 統計物理学みたいなものですか。

大橋 あれは本が出たわな。

吉田 応用力学会編の『応用統計学』。

大橋 森口繁治さんだとか、あの人たちが講義した。

浦田 公開的な講座をやったんですか。

大橋 そうそう、公開講座。

浦田 それは、戦争後すぐ……？

大橋 戦後、昭和22年かな。それはすぐわかります。応用力学会の本があるわけだから。

浦田 それから、京大へお帰りになるんですね。

大橋 それからサンプリングが大はやりで、われわれ工業大学にいたんだけれども、東大の連中とか、都内の大学の統計学の教師をみんな司令部が集めて、新理論を教えるといって、サンプリングの講義をするんだ。

浦田 それはいつごろでしょう。

大橋 サラソンとかいたね。占領初期だ。アメリカのサンプリングの新理論を教えてくれた。

浦田 それは、対象は大学の教師……？

大橋 そうそう、統計学の。それもちょっとどこかに書いたことがあるかな。

浦田 戦後の先生の著書で……？

大橋 『社会科学的統計思想の系譜』かな、あそこに材料をかなり出してあるんだ。

浦田 戦後の「アメリカ軍の統計調査」というのがありましたね。

京大でのことは、皆さんに聞いていただければいいと思うんですが、先生の統計学の第1回の京大ゼミで、教員調査をやられていますね。それについて何か、これは知っている人が先輩にはいると思いますけれども……。

大橋 教員調査は、1950年、蜷川知事が当選したわけだから、それで、京都府では労働経済研究所をつくりかけていた

わけで、あそここの第1回の仕事として、教員調査を教員組合と一緒にやった。それは、教員の名簿とあわせて、全部個別のあれをきちっと出しているわけで、1950年の労働時間調査は、全部いま労研に個票も行っています。

浦田 それは全数調査ですか。

大橋 いや、抜き取りです。学校の規模別に抜き取った。これは、当時としては大調査だったな。ゼミの連中は、それで相当食いつないでいたんだから。

浦田 まとめられたもので尽きているんでしょうか。それともまだ集計部分は……。

大橋 集計は完了していない。途中で放棄した。一応かっこうはつけている、3冊か出して……。

浦田 その次の時期に、私はゼミナールに入るんですけど、先生がご病気になった時期で、その時期はずっと大変だったと思うんですが、その後、経統研に移るということで、ご病気の中で大変努力をされるんだと思うんです。そのあたりからは皆さんよくご存じなので、どうぞご質問してくださればよろしいですが、先生何かつけ足しておかれることは……？

大橋 別にないですね。経統研の初期の資料は一括してあるはずなんだけれども、それが出てこない。

浦田 先生のところに……？

大橋 会計関係、組織関係。

浦田 伝票つくりましたね。

大橋 うん、伝票つくった。

浦田 それで思い出したんですが、さっきのサンプリング研究に続くのかどうか知りませんが、カリ版刷りの論文を経統研の名前で出したのがありましたね。

大橋 はい。

野村 「東ドイツの統計理論」1、2ですね。

浦田 その前もまだあった。

大橋 その前、サンプリング調査。あれはたしか国民経済研究所。

川口 いまの教員調査の件ですが、先生が本格的にサンプリングの調査をおやりになったのは、それが最初なわけですか。

大橋 あれは学校の抜き取りで、学校だけの規模別の抜き取りだから、サンプリングといえるかどうか。

浦田 かなり大量のサンプルですね。

大橋 むしろそうじゃなくて、1950年、第1回の知事選のとき、当落予測調査をやった。これは永末英一さんと一緒に「サーベイ」という雑誌に結果を出しているはずだ。それは教育学部の森口兼二さんも関係している。それがむしろ世論調査といえは世論調査だ。

川口 以前、蜷川さんが、永末に世論調査の仕方はオレが全部教えたんだとおっしゃっていましたが、そのころのことですか。

大橋 そうそう戦後ね。

野村 経済統計研究会を始めましたのは昭和28年ごろだと思いますが、その前に、統計懇談会ですか、そういう組織が母体として3～4年続きましたね。その時期は、先生はどういう仕事をしていたか。

大橋 あのところ、何もやってないんじゃないですか。

野村 昭和24年、京都にお移りになってからの話です。

大橋 京都に来て、広畑だの鉄鋼の調査をやっている。

豊崎稔さんと……。

浦田 やっておられましたね。

大橋 その鉄鋼の調査をやったときに、職場別の労働配置をやっている。これを山田盛太郎さんが欲しいっていうので、あのときに貸してあげた。先生が死ぬ前に鉄鋼調査をやっていた。その結果、どうしているかな。何か書いているのと違う……？

浦田 「分析序説」というのは、どこに書いておられるのですか。

大橋 いやいや、山田盛太郎が……。

浦田 その労働関係のものは、先生としては発表されていないわけですね。

大橋 はい。

浦田 まとめられたものが山田さんのところに行ったんですか。

大橋 生の原稿です。

浦田 工場別、事業所別みたいな調査ですか。

大橋 職場別、職種別になるかな。それから、機械化してずいぶん能率が違ってきちゃうわけ。それについて山田さんが何かやる予定だったようです。

浦田 その時期としては珍しい調査なんですよね、労働過程というのとは。

大橋 だから、八幡なんかでは、そういうことをやってもらっては困るということもかなりいわれて、しまいには工場へ入れなくなっちゃった。広畑と八幡と調査をやった。

浦田 それは科研費か何かで……？

大橋 科学研究費だ。豊崎さんがキャップ。

浦田 先生なんかがいいい出されて……？

大橋 いや、豊崎さんだったと思う。

野村 それじゃ、先生のお若いころの話、いまの若い方々と一緒ぐらいのときだと思うのですが、そのころの話を聞いてください。

浦田 五十嵐さんは鉄鋼調査には関係しておられない……？

五十嵐 僕は25年入学だけれども、1年上の森本氏、あのあたりのゼミがイギリスの鉄鋼業なんかやった。僕は1年下で、そういうことは全然やっていない。

大橋 広畑に行ったときだったかな、京都駅が燃えちゃったの。

野村 京都駅の木造のクラシックなものが……。

ソビエトのは「統計彙報」の第1回目に引用がありますね、ネムチノフとマルイシエフの論文。

大橋 昭和25年ですか、その「統計彙報」が小島勝治さんの手に入っていたわけです。

野村 あれにたしか引用がありますね。

泉 そうなのは、先生とか内海さん、上杉さん、戦時中にご存じだったんですか。

大橋 いやいや。

泉 先生個人がご存じだったわけで、蜷川先生のところの若い人たちが知っていたわけじゃないんですね。

大橋 知っていたわけじゃない。

木下 出てすぐに先生は読まれたわけですか。

大橋 いやいや、そうじゃない、後から。

野村 戦争中のそういう統計学の研究は壊滅してしまし

たか。

大橋 ダメだったですね。ただ、企画院がわりあいにはやっていたね。

野村 それは、スミット (Smit) の『統計学と弁証法』の堀江一訳のがあって、もう1~2あったと思う。

大橋 戦時中に企画院がやっていた戦時計画経済、新聞に出たことがある。

野村 戦力見積もりでしょう。国力見積もりですか、それはいつの時代でもありますね。

川口 石倉一郎先生がやっていた仕事。

吉田 さっき、先生が京大をやめさせられたとき、永田さんとか坂寄先生なども一緒にだった産業組合研究会、蜷川先生中心だったあれは、先生はご関係あったわけですか。

大橋 全然関係してない。

吉田 してないのに、あれと関係があるというこじつけで、特高はやってきたわけですか。あれは、一斉検挙された後ですね。

大橋 東京と京都関係を指導している、東京と何かつながりをつけているという向こうの想定だろうな。

吉田 実質は全然なかったのに、それをいいがかりに来たわけですね。

大橋 そうそう。農学部の大野君、あと永田君。

何かあれによると、松尾賢一郎さんは関西共産主義者団のメンバーになっているな。

吉田 あれというのは「特高情報」。

大橋 そう。

浦田 「特高情報」の大橋先生の名前は、隆憲ではなか

ったように思いますか。

野沢 そのころ、蜷川先生の社会運動に対する態度はどうだったんでしょうか。

大橋 主唱していたけれども、神経衰弱と称してあまり学校に出てこなかったし、事実、何か精神状態ちょっと悪かった。ノイローゼみたいで、私が「もっと勇敢でいいじゃないか」といって怒られたことあったな。(笑) 東大なんかの連中のあれを見てみると、そういう感じするわな。

泉 先生が蜷川先生におっしゃったわけですか。それで怒られたわけですね。

大橋 そう。(笑)

川口 話をもっと前に戻りますが、先生が蜷川ゼミにお入りになろうと思ったのは、東京のときにそう思って京都に来られたんですか。それは、マルクス主義経済学もおやりになりたいということと、やっぱり調査みたいなことにも関心がおありになったわけですか。

大橋 実証的な方法論ね。

川口 哲学みたいなところとも関係があるということもあったわけですか。

大橋 それもある。

野村 有沢 VS 蜷川の選択の基準はどこで決められたんですか。

大橋 有沢さんののは観念論だもんな。直接、弁証法とあって、証明が欠けているものね。納得性というか。

野村 その当時からそういうふうにお考えになっていたわけですか。

大橋 集団論の考え方、蜷川さんの方が素直だろう。納

得がいく。

野村 それでは第2部に入って、先生が統計学の研究の体系化を目指されて、勉強を再開されたときのお話を中心にしてお尋ねしたいと思います。主な質問を、京都大学の吉田さんをお願いいたします。

吉田 私自身、それだけの知識もないものですから、後でいろいろお聞きしていただけたらと思います。

先生が京大に来られる直前に、「8000万人」という雑誌に有名なサンプリング批判の論文を書かれるわけですね。これが数理統計批判という意味で、先生のご業績の中では突出しているような感じがするわけです。といいますのは、これを1つのオリジンにして、その後、経済統計研究会の中で、内海庫一郎先生や、あるいは岩崎允胤先生などが引き継いで、数理統計批判という方向で展開されるわけですが、先生ご自身はむしろその後、そういう方向の論文を書かれませんか。強いていいますと、41年に発行された「日本の統計学」という本、これは30年代に「農林統計調査」に連載されたものですが、これ自体がある意味で、1人1人の統計学者の伝記をまとめながら、それを通して、数理統計批判といいますか、数理的形式主義批判をインプレッシヴに書かれたように思うんです。

最後に先生は、「中期経済計画批判」を山田耕之介さんの論文を引用されながら書いておられます。軽卒に読む人は、ここでなぜそれが出るんだと思われるかもしれませんが、全体を通じての先生の数理統計批判あるいは数理的形式主義批判の主張が、最後のところで出たように受けとめることができると思うんです。これが1つの流

れです。

京大に来られてからは、昭和20年代はご病気で論文の発表が少ないんですが、昭和30年代に入って、戦前からのマイヤーの研究の延長といいますか、積み重ねになると思うんですが、後に、昭和36年の『現代統計思想論』にまとめられる一連の論文が、統計学方法論や社会統計学の基礎論として、社会集団論的なものとして発表されます。毎年1つ、2つ出て、36年にそれがまとめられる。これが大きなもう1つの流れですが、むしろこちらが先生のご研究の主流という感じがするわけです。

34年には、これは後で野沢さんから出ると思いますが、京大の『経済学部40周年記念経済学論集』に書かれた、有名な「社会階級構成表」の論文が出るわけです。ですから、20年代に数理統計批判の突出した業績が1つあって、30年代に入って、さらに大きな2つのお仕事が出てくると思うのですが、私としましては、前の2つをお伺いしたい。

最初に、いまでも浦田さんのところでちょっと出しましたが、「8000万人」に「近代統計学の社会的性格」という有名な論文を書かれた前後、その背景というあたりをお聞かせいただけたらと思うんです。

大橋 それは東京で民科があったんだ。哲学部会と自然科学部会、社会科学部会。そこでサンプリングが唯物弁証法だというから、そんなことはないだろうと思って、これは批判しておかなければいかぬなと思った。民科の連中はみんなサンプリングをそういうふうにとってしまっちゃうんだ。それはおかしいじゃないかといった。それで豊田四郎さんらが、民科でそういうことをいうもの

だから。特に北川敏男さんかな。あのころ増山さんが朝日賞を受けた。当然、数理的、機械的な考え方は唯物弁証法のはずはないから、それを批判しておいたわけだ。東京工大には数理統計学の河田龍夫さんがいた。河田さんにも、書いた後、何か説明させられたけれども、それでいいんじゃないかというようなことをいつていた。(笑)

浦田 河田さんは数理統計ですね、応用部門じゃなくて。

大橋 数理専門。戦時中、軍の仕事をやっていた。

吉田 軍事研究の先頭に立っていたのに、戦後はサンプリングの導入に走り回り、かつ、一種のイデオログとしてがんばった。増山さん、北川さんあたりは、ドイツ社会統計学を批判して、絶対主義の官僚調査用の統計学であり、経験批判論のピアソンらの統計学がブルジョワ社会の統計学であり、来たるべき計画経済の統計学こそ推測統計学である、とまでいつていた。

ですから、近代化論と社会主義というものが、つかず離れずの形で結びつけられていた。資本主義社会を超えた統計学を、いまわれわれは日本の近代化という任務とあわせながら宣伝、普及にこれ努めているんだという思想が、昭和23年、先生の論文が出るまで流行していたと思うんですが。

大橋 戦後の時期、僕は15年間に分けて一括して考えているんだ。戦争責任の問題と学問とのつながり、それから、自分自身で考えるというか、弁護論が、日本の場合おくれていて、そういう考え方がきちっとしてないんじゃないかな。

吉田 先生がよくおっしゃっていたんですが、日本の理学部系に数理統計学の講座がつくられたり、文部省に研

究所ができたりにしたのは、全部戦争遂行の関係であった。また、意識的に数理統計学のそういう効用を唱えて、戦争中、学界の中に数理統計学の基盤をつくった。その人たちが戦後、今度は社会主義——社会主義とはいわない、計画経済ですが、それにふさわしい統計学として数理統計学を引っ張り出した。これを先生は非常に憤慨しておられた。

大橋　そういう点で戦争責任の問題、僕はやっぱり日本で抜け落ちていると思うな。だから、教科書問題というのは、ああいうふうな処理は当然なんで、社会的責任の問題はどうしても抜け落ちちゃう。

それがまた戦後の、敗戦と農地改革を含む15年間はいんだけれども、高度成長になると、貧困だとか、戦争だとか、平和問題というのは、完全に抜け落ちちゃう。そういう意味で僕は15年ずつで区分して、戦後の15年という時代をきちっと押さえておく必要があると思うんだな。いま高度成長段階の考え方がずっと一般的だけれども。

吉田　そういう戦後の数理統計学が果たした、あるいは果たそうとした役割りに対する強い憤慨が1つあったとしますと、もう1つは、先生が京都へ来られたときのもう1つの関心であるヘーゲル哲学なり、そういう科学方法論なりへの強いご関心の延長上で論文が書かれた、というようにわれわれ拝読できるのですが、いかがでしょう。

大橋　ヘーゲルにやっぱりつながっていると思うんだけれども。

吉田　そういう意味で、先生の論文を契機に、軽率に社

会発展段階と数理統計学を結びつけたり、数理統計学と哲学を安易に結びつけたりする風潮に1つのとどめが刺される。20年代後半には、そういう基本問題はさておいて、サンプリングも、今度は技術論的サンプリングという形で、技術的には有効であるというぐあいに向向転換が起きてくるその1つのきっかけになったと思うんです。それを見て、先生は、それ以上深追いせんていいというぐあいにお考えになったんでしょうか。

大橋 いつまでも方法論にこだわっていると、全然進まないんだな。一生かかっちゃう。(笑) それで、解決はついてないけれども、もういいかげん切り上げちゃった。

吉田 それが今度また問題が出てきたのは、昭和39年の中期経済計画です。中期マクロモデルというものでコーティングされた政府の経済計画が出てくる。このとき、また再び社会的な役割りという意味で憤慨されて、『日本の統計学』での批評をされたという感じを受けるのです。

一応、数理統計の問題はそういうことにしまして、むしろお伺いしたいのは、先生の主著の1つでもあります『現代統計思想論』にまとめられた一連の論文です。これは昭和20年代後半のソ連の統計学論争などを1つの契機として、従来のドイツ社会統計学の研究をさらに発展させられたと思うわけです。これは、経済統計研究会の初期の学会活動とも重なってくると思うのですが、そのあたりのことをお聞かせいただけませんか。

大橋 やっはり方法論の考え方がいろいろあるんだけれども、あまりきちっとしてないんじゃないかという気がするんだな。僕自身も、あまり方法論はきちっと整理されていないんだ。ちょっと方法論の整理は困難だな。田

辺元さんなんかもずいぶんやっているけれども、結局、あまりきちっと納得いくようなところまで行っていないみたいなのがするんだな。

それで、今度、イギリスのウォーコップという人の『合理性への逸脱』という哲学書があるんだけど、それはどっちかという主観的な観念論で、見たところ、そういうふうな形になっているけれども、内容的には、主観的観念論で、客観主義を否定しているような形にはなっているけれども、わりあいちゃんとした考え方じゃないかなという気がするんだな。ウォーコップ。ヘーゲルなんか通り過ぎていし、どうもあれはあまり簡単でよくわからないけれども、方法論として、一応ああいう考え方もあり得るんじゃないかといっている。

それは、東大医学部の精神医学、精神病理学の助教授の安永浩という人が盛んにウォーコップを宣伝するとともに、その方法論を使って研究しているんだ。一番の考え方の基礎は、「死ぬことを回避する行動」と「生き生きとした行動」とを区別しながら分析していっているんだけれども、わりあいわかりやすい基礎論があるような気がする。

どっちにしても、方法論はあまりまとまってないし、どうも方法論だけ取り出してやると観念化しちゃうんで、具体的な研究の中でやるべきだと思うな。そういう意味で、具体的な問題を抜きにした方法論は、どうも観念論になっちゃって、実りがないような気がするのです。

吉田 先生に方法論が不十分だとかいわれると、われわれ、何とも後続けられないんですが……。

大橋 そういう具体的な研究を通してならいいんじゃない

いかな。それを抜かしちゃうと、どうも……。

吉田 先生の場合、非常に強烈な方法論に対する関心、特に、ヘーゲルへの傾倒という形でお考えになると同時に、それを具体的な分析において高めていくという両面がおりになったような気がするのです。

大橋 ヘーゲルの考え方もそうじゃないかね。具体的普遍というような考え方、具体的なものを離れて、方法論を抽象的に出してくるやり方は実りがないという考え方、これは正しいんじゃないかな。

吉田 具体的な問題をちょっとまたお伺いしたいんですが、この昭和30年代の先生の統計学方法論、あるいは基礎論に関するご研究の1つのピークといいますか、成果は、やはりその後、経済統計研究会を15年なり20年支配した「統計学＝社会科学方法論」を、ソ連での統計学論争の総括という形で定式化されたことだと思うわけです。これは、先生の戦前のマイヤー研究とどう結びつくのでしょうか。この社会科学方法論とは逆の実質科学説としてのマイヤー研究などを、京大の助手でおられるころずっと続けられ、その主著を翻訳された。その評価は大変高いのですが、それとどうつながるのでしょうか。

大橋 マイヤーの場合、具体的な研究はあって、実質科学説といっているけれども、中身はやっぱり方法論じゃないかな。そういうような感じがする。具体的研究を通しての方法論をきちっとしていくという立場から、具体的な研究がかなり論じられているけれども、内容的には結局、方法論を述べている。しかも、蜷川先生にいわせれば、官庁統計のつくり方だな、そういうのが具体的内容じゃないかね。内容科学といったら、むしろ経済学と

か社会学とか、そういう実質科学の方がちゃんとしてい
るんで、マイヤーの場合、結局、特色といえば、統計方
法を使っているというところに特色があるんで、本質的
には方法論じゃないかと思うんだよ。

吉田 戦前の研究とは、ある意味で内容的なつながりが
あるということですね。

もう一つお伺いしたい点は、先生の『現代統計思想論』
序言でしたでしょうか、「現代統計思想論」から「現代統
計理論批判」へ、それから、生きた現実との真剣勝負で
ある「現代統計批判」へという一つの方角を述べておら
れたと思うのです。方法論の延長上にソ連の統計学論争
を総括されたのは、『現代統計思想論』である。あるいは
間違いかもしれませんが、私ども見ていますと、次の「現
代統計理論批判」ないし「現代統計批判」というのは、
野村さんと共著で書かれた、昭和38年の『統計学総論』
の一番むずかしいところで、いろいろな人が引用するの
ですが、本当に何回読んでもむずかしいところです。経
済学方法論の中に統計学を位置づけられようと言われた。
あそこで次の段階に到達されたように、私ども拝見して
いるのですが、そのように見てよろしいでしょうか。『現
代統計思想論』から「現代統計理論批判」ないし「現代
統計批判」へという発展だと見てよろしいでしょうか。
そのあたりの事情をいろいろお聞かせいただければと思
うのです。

大橋 経済学方法論の中に位置づけて、それで経済学へ
移るといふか、具体的な研究へ行くといふか、やっぱり
経済学の中のそういった数量的な研究方法として統計学
を位置づけるのは必要なんじゃないかと思う。

経済学方法論の中の位置づけとしては、そういう位置に持ってくるのがよいと思うので、一応、形式的にそんなふうに割り切らないと、整理がつかない。その程度のことなんだな。あまりはっきりした自信があるわけじゃないんだよ。

野村　むしろ積極論に傾いていらっしゃるでしょうか。統計方法を積極的に経済学の方法の中に組み込んで、そして分析に使えという……。

大橋　いや、そう積極論じゃないんだな。やっぱり質的な研究が前提になるんで、量的という場合、前提がかなり制限されていると思うんだ。ウォーコップの中には出てくるんだけど、ニーチェのあれを引っ張って、統計学なんていうのは、同一物が2つ以上あるという誤った見解を前提にして組み上げたものだ。数学、統計学、統計的処理というものは、同一物が2つ以上あるという迷信の上に組み立てたものだ、という言い方をしている。そういえば、同一物が2つ以上あるという前提の上に立っている、2というやつは。(笑) それは同一物が、空間、時間、厳密に規定したら同一物じゃないんで、事物的には位置の差異を抽象しちゃっている点には確かにあるね。そこから非常に危険な方向に行く道がつけられている。そういう批評をしているんだ、ウォーコップは。

野沢　ちょっと関連して。1つは、いまの経済学と統計方法、いまのように、経済学、経済分析の中に統計方法を位置づけて、対象である経済認識の中で統計方法をどう駆使するか、利用するかという観点で研究されまして、それが、さっきの「立命館経済学」の『「経済学方法論」と統計方法』という論文に結実している。

これについても思い出があって、先生に動員されて、吉田さんとか私とかがここでワーワーいって、お邪魔したような記憶があるのですけれども、同じ社会統計学派でも、北大のグループ、内海先生を中心とするグループは、むしろ、統計方法論を科学方法論として純化していくという方へずっと進んでいくわけですね。むしろ経済学というよりも、一般科学方法論の中で性格を検討する。ですから、弁証法という抽象的なところで検討する。その分岐、あるいは違いというのは、どこから出てくるのかということをとときどき思うんですね。どこからその違いが、たとえば先生と、それから、内海庫一郎先生との研究方法の違い、あるいは関心の違いが出てくるかということですね。

大橋 具体的普遍のとらえ方の差異から出てくるのではないかと思う。やっぱり具体的な現実の中で抽象論、方法論をやることの強調は、ヘーゲルの理解の仕方も違っていただかないかな。だから、具体的普遍というような考え方じゃなくて、内海さんの場合、抽象的な普遍になっていくのではないかな。そこらあたりが違うのではないか。

吉田 内海先生も最終的には、帰結として、実証ということとは必ずいわれるんですが、内海先生の実証方法は、実態調査に行くという、ある意味で、統計利用から離れたところで実証するという立場がある。

それとの関連で、いま、先生の立命館の論文が出ましたが、それは『統計学総論』にエッセンスが収録されていますね。『統計学総論』用に書きかえて。あそこで重要なのは、資料の収集、実証方法ということです。統計だ

けてない、資料の収集と利用が、実証方法という形で、
 経済学の認識サイクルの1つの欠くべからざるモメント
 として位置づけられておられると思うのですが、このあ
 たり、先生の統計方法の位置づけをお伺いしたい。
 大橋 あまり詳しく考え切れてないんだよ。野村君と、
 そこのところを考えたんだけど、迷路にぶつかって、
 (笑) 進まないんだ。経済学としても、集団と個別を、
 特に集団を対象とせねばならぬと思うが、もういいかげ
 ん、この辺で打ち切って逃げようかということ、(笑)
 むずかしいので逃げた。こんなのになだわっていたら、
 一生、もたもた、ぐるぐる空回りしてしまう。
 野村 数学の方の方法の適用は、これは後で吉田さんから
 お話出ると思いますけれども、私個人としては、統計
 を歴史の資料として割り切ったらどうだろうという感じ
 を非常に強く持つのです。たとえば、史学研究法という
 ので、いろいろな本が出ていますでしょう。たとえば、
 一番コンパクトなのは今井登志喜の本だとか、フランス
 のマルケブロックの本でも——フランスは得意ですね。
 そういう統計を数理的解析のマテリアルと考えないで、
 歴史解釈のマテリアルというふうに割り切ったら、実証
 方法のつかいがもう少し軽くとれるように、このごろ
 思っているんですけれどもね。新聞記事の高級なやつく
 らいのセンスで。(笑) この議論は、午後時間があったら、
 してみたらおもしろいと思いますね。
 吉田 昭和30年代に内海先生が集団論で、集団は1つの
 実体を持ち、個性を持つものであるが、それを構成要素
 にばらばらに分解してしまう統計方法は、すでにそこで
 統計的形式主義なり、数理統計なりへの門戸開放が始ま

るといわれた。先生があれを書かれたとき、私、野沢さんと一緒にお話を伺いましたが、先生はこの考えに対して若干批判的であった。つまり、内海先生の集団としての社会的な存在、あるいは社会構成体的なものの否定、個別的な実体と個別的な存在、個性的な存在の重視という内海さんの考えに対して批判的であったということは、実態調査オンリーではなく、統計資料としての実証方法の意義を評価するという点で、内海先生と少しずれていたような気がするのです。

私が基本的にお伺いしたいのは以上です。どうも、あのころになると、奥様を交えていろいろ話したいような思い出が数多くあるわけです。数理統計については、先ほど申し上げた『日本の統計学』の末尾に1つの締めくくりを出しておられて、それに尽きると思います。

大橋 問題は、個体、個別を第一義とするか、集団、集団現象過程を第一義とするか、にあると思う。私は、後者をとっている。ウォーコップは、金太郎アメはどこを割っても同じ（類似の）顔が出てくるが、コップを割っても、無数の小さなコップにはならない。全体と部分の関係は、その形態以外にもある。ウォーコップは、全体と部分とのつながり、全体を分解して部分に分けると、部分を寄せ集めて全体にするという操作、その両者を区別して問題にしている。全体のどちらがどう先になって、どういう順序で問題にするかということも分析している。両方一緒かどうか、両方の過程が必要なんで、全体の考え方と部分の考え方、かなりはっきりと考え方を示しているような気がするんだけれども、蜷川さんの場合も、単純な全体と部分の関係だけでしよう。集団も、全体集

団、部分集団、その比率、それで確率、極限值というわけですね。ヘーゲルの場合、そこに、個別と特殊、一般と普遍というふうに、それらの間のつながりの問題が入ってくるわけだけれども、このあたりのつながりをきちっとすると、もうちょっといろいろなことがわかりやすくなるかと思うんだ。ここら、本当はきちっと整理すればいいんだけど、1955年の脳栓それから、あまり考えるのがめんどうになっちゃって、ダメなんだ。ぼけてきちゃってね。(笑)

吉田 初期のマイヤー研究の中で、マイヤーの「集団の性格」を書かれたときに、もうすでにその問題は先生の中にあって、要するに、それをずっと持ち続けておられるんだと思うんですけれども、先生の場合、少し俗に換言して、たとえば、社会的な量というものです、それは、単位があって、合計しないと出てこないというふうにも考えられるんだけど、ある意味で、社会的な量というのは、そういう単位を一々規定しなくてもある。そういう面も先生は考えておられる。

大橋 はい。だから、集団の1つの形態には、いわば有機体みたいなものが存在すると思いますね。

吉田 たとえば、会計的な量といいますか、企業内の会計量というもの、もっと素朴に経理上の量というものは、初めから単位の合計として割り切っているものなんですか。

大橋 単位の合計って、そういう規定があるけれども、まとまって初めてそれ自体として意味を持ってくる場合がある。そうすると、単位とは無関係に、それ自体が社会的な意味を持つという場合が出てくる。そういうとき

は、部分とか単位とか抜きにして、全体そのものが1つの個体みたいな意味を持ってくる。

浦田 一遍そちらから見るのも必要だという気が私はするんですけども、先生のそういうお考えの中に、きょうは会計学の話が出ないけれども、蜷川先生の経済学もやられたし、先生は日本網管時代に足かけ5年間経理をやられて、先生の思考の中に、統計というのと、もう一つ、会計みたいなものがあるような気がするんですが、それは、そういっちゃいけませんか。

大橋 別に、あまり区別していないんだよ。

吉田 ちょっと補足させていただきますと、先ほど、数理的形式主義批判に対して、1つのモニュメントとして『日本の統計学』を挙げました。これは、日本の社会統計学者を取り上げていますが、「統計的方法」という本を書いた小倉金之助、いわば数理統計学のバイオニアである小倉金之助を、むしろ社会的数学史、あるいは数学の階級性という面で、非常に強く評価しておられる。また、戦後の民科の活動という面で評価されている。また、有沢さんに関しては、やはり戦前逮捕されたあたりは非常に好意的で、その辺を重点に書き、戦後はかなり厳しく批判しておられる。最後に天皇のご進講に出て、グラントの講義をして、王様の首を切った市民軍のメンバーであるグラントの講義をやるあたりに有沢さんの真髓があるというように、非常に手の込んだ評価をしておられる。(笑) このような考えが結びにエクспリシトにあらわれているのがおもしろいんじゃないかという気がいたします。

先生は、あまりご自分の書かれたもののことをお話し

やらないんで、ちょっと、かわって紹介させていただき
ます。

大橋 有沢さんも、あれを読んで喜んでおられたようだ。

吉田 非常に手の込んだ評価をしておられますからね。

大橋 有沢さんにしても大内さんにしても、いろいろと
おもしろいよ。大内先生には、あれ以来おつき合いさせ
ていただいた。

野沢 先生、あのころ、アンドレ・マルシャルの翻訳を
監修なさって。

大橋 マルシャルも来たね。彼の兄貴も来た。

五十嵐 ジャンと、両方来た。昭和40年ごろですか。

大橋 賀茂川の料理屋で会ったな。

五十嵐 立命館でも何か講演があったんです。

大橋 あれもちょっと直さなければいかぬのだ、という
ことをいつていたな、マルシャルが。

五十嵐 翻訳した時点は、出版された時点から10年以上
たっていますからね。

浦田 先生がマルシャルを演習で使われたのは、京大時
代の最初の演習から始められたんですか。私は、2回目
の演習のときにマルシャルを読むんだというんで、フラ
ンス語をあわててやってこいといわれて……。

大橋 五十嵐君だの、田中君、それから、真継君、あの
ころ、フランス語をやる人たちが集まっちゃったものだ
から。

五十嵐 真継氏、田中氏は、僕ら直接知らないんだけれ
ども、年代は僕らと同じなんだ。昭和28年卒業ですね。

僕は、そのころは統計学のゼミに入っていないんで、僕
自身も、なぜ訳さされたのかよくわからない。あれは浦

田さんから紹介があって、僕の大学院の3年目ぐらいに関係した。話を聞いてみると、田中氏とか真継氏は、卒業論文のかわりに、あれを部分的に翻訳して出された。それが残っている。

川口 国際的な話のついでに、1960年に東京でISIの総会があって、先生、それに、京大の「エコノミック・レビュー」に出した論文で参加をなさったと伺ったのですが、そのときのお話、全然まだお伺いしたことないんで、どういう経過で参加され、そのときの反響はどうだったか。『現代統計思想論』の翻訳……。

吉田 『現代統計思想論』の巻頭論文ですね。

野沢 終章。

吉田 終章でしたか。

大橋 ほとんど反響ないよね。英文もみんなに配ったわけ。

吉田 最後に星取表みたいなものがある。それぞれの立場について、○か×か、つけてあった。(笑)

浦田 ○×を学者につける。いまここにいる人、○×つけてもらったら……。

野村 僕はいままでお聞きした記憶がないんですけれども、イギリスの統計学について、先生はどういうお考えをお持ちだったんでしょうか。

大橋 あまりやってないんだ。

野村 ユールの方法論、ホーレーあたりは、経済統計の具体的なやつですね。19世紀の終わりから20世紀にかけて、2つないし3つくらい系統があったと思うんですが、先生の場合、学生時代からご関心をお持ちだったんでしょうか。

大橋 統計学というより、社会調査の方に関心が強い。

野村 ロントリーとか、あの辺の問題はお聞きしたことがあるのですが、それと並行して当時ありましたイギリス学派、その個々の業績について、あまりお聞きしたことがなかったの、この際……。

大橋 いや、ほとんど読んでないんだな。

野村 当時の日本としては、そういう傾向だったんでしょ。一般的に、ドイツ社会統計学が盛んで。

大橋 いや、そうじゃない。むしろ、私学の人たちは大ぜい英米の方をやっておられたんじゃないかな。ドイツをやっているのは、東大、京大の帝国（主義）大学だろう。九州はどうだったかな。九州は、高橋正雄さんたちだろう。だから、ドイツ社会統計学が、必ずしも盛んという雰囲気ではない。

五十嵐 野村さんがいわれた意味は、昭和初年に、景気分析に統計的方法を使うのが流行した時代がある。あれと関連するんじゃないでしょうか。そうでもないですか。

野村 豊崎さんあたりの景気分析はアメリカだと思うんですが、イギリスは、厳然たるブックメーカーがそろっていましたね。

吉田 ユールとか、ボーレーね。

野村 何とんでも、方法論はユール、経済統計はボーレー。あの本は何版も重ねていますので、だれも目につかないはずはないんですけども、好みがあるのでしょうか。

大橋 もう大体やられていたね。

川口 その話から前に戻るかもしれませんが、蜷川先生のムーアとかデービス、そういう研究の系譜は、蜷川ゼ

ミの中では、どなたが結局お引きになったわけですか。

大橋 景気変動は、あまりやっている人いないな。

川口 蜷川先生ご自身は、とてもそういう経済分析とか……。

野村 初期の場合はね。研究者は、翻訳をやるとか、自分で実証的に規則性を何とか出そうと、それぞれ努めていた。

吉田 両方とも大正……？

五十嵐 昭和初期でしょう。

大橋 そうだね。昭和初期までだね。

吉田 本格的に集団論をつかむまで」というと語弊があるかもしれませんがけれども、それまでは……。

野村 時勢も時勢だったんでしょう。日本ではやったでしょう、ハーバート・メソッドは。柴田銀次郎さんもやっているでしょう。

吉田 もう一つ、補足しておきたいんですが、先生は30年代後半、いろいろな論文を書かれてまとめられた時期は、並行して、階級構成の計算をしておられたわけですね。岩波書店から階級構成の本を出すということで、最後のころはあまり催促されなくなったでしょうが、やいやい催促されながら。

大橋 毎月1回は催促だね。

吉田 あの時期に立命館の雑誌に書いた『「経済学方法論」と統計方法』の論文は、そういう階級構成上の計算と同時並行的に書かれていたわけですね。

野村 『日本の統計学』で続編をお書きになりますとしますと、どなたあたりをまず「お考えになりますか。(笑)

吉田 星取表をお書きになりますか。あれは大変好評で

農林統計協会も、ぜひ続けてほしい、続けて、『世界の統計学者』を書いてくれと、しきりに攻められていましたね、終わった段階で。

大橋 世界の統計学者は、「追悼文書」を見るとすぐ書けるが、現地主義者には無理だ。それはやった方がいいに決まっている。

野村 たとえば小島さんとか、われわれの先輩で、そういう本の中で漏れているように思われる人が……。

大橋 今度、テープがかなりできたから、いいや。それで、岩波で『学者と学風』という題で出版したらどうだということをいつていたことがある。もうちょっと広げたら、それはそれでいいんだけど、ああいうのを書いているのは、のんきでいいな。(笑)

野村 外国の統計学もお書きになって、マイヤーあたりから始まって、ネムチノフ……。

大橋 あと、亡くなったときは追悼録があるから、それを種にして、大体まとまっているから、書くだけなら書けるんだ、現地調査なしでね。

野沢 毎月お書きになったのは、とても忙しかったですね。

大橋 わりあいにはそれは楽だった。

夫人 それは楽だったんです。

吉田 戒名、お墓、どこに眠っておられるか、それが必ず出ているんです。お墓など、一々見聞に行かれたんですね。

大橋 大体行った。

吉田 お墓の見聞に行かれて、戒名写してこられる。

大橋 呉文聡さんは喜んで、広島にわざわざ呼んで、

あんた、やってくれたもんだから、全集出す気になった
 といって。あの全集、僕に協力してひとつやってくれな
 いかといわれたんだけれども、あれに首突っ込んだら、
 大変なことになる。土屋喬雄さんが主にやってくれた。

野村 私は杉亨二のお墓は、お供して行ったことがあります。
 東京の下町の何とかというお寺へ。

大橋 私電の池袋の……。

野村 戒名を写しに行かれたんですね。(笑)

それでは、前半を一応こなしただけにして、お話がま
 たもとに戻ることにありましたら、ご自由に……。昼か
 ら、階級構成で現実分析をお始めになったときの内容を、
 主に野沢さんからお聞きすることにいたします。

どうもありがとうございました。

野村 それでは第3部としまして、日本の階級構成の実
 証研究を先生が始められた1960年代の中ほどの時期の研
 究状況について、お話を伺いたいと思います。野沢さん、
 お願いいたします。

野沢 昭和34年に、『京大経済学部創立40周年記念経済学
 論集』に「社会階級構成表の意義と限界」と題して、そ
 こで先生は初めて階級構成の論文を書き始められたわけ
 です。この後、先生は階級構成の研究をずっと精力的に
 なさいまして、それで日本全体の階級構成、独占資本家
 層の階層構成、労働者階級の内部構成というテーマで、
 ずっとこれまで約20年間余り続けてこられた。

最初に、先生からそのきっかけ、それまでの論文には
 階級構成の分析というのはないんですけれども、どうい
 うきっかけでこういう対象に着手されたか。また、その

中で、国勢調査による組みかえというのは、いまだもって階級構成研究の財産のようにして受け継がれているんですけれども、その方式を発明された経過などについて、伺いできればと思います。

大橋 毛沢東が「中国社会の階級分析」を書いている。それは1926年。同じ年に、河上肇が『階級闘争の必然性とその必然的転化』というのを書いている。高等学校のときに、フハーリンだの、スタ・フハ全集とか、いろいろな本が出ていたけれども、河上さんのそれが非常にわかりやすく、階級闘争の必然性の研究会をやったりしたことがある。そのころから階級論はずっと大事だった人ですね。それで、河上さんが編集主任になっている「マルクス主義講座」の第1巻が、たしか階級分析だ。それが言葉で書いてあって、あまりはっきりしていないんで、それが下地になって階級分析はやらにやいかぬなと思っていた。

それで戦後、さっきの「飢餓線上の生活実態」に触れた人だけれども、健康水準だの、生活水準の問題があって、それに引き続いて、そのころ、京都の事業所統計、たしか、あれはカードから1つずつやられたものだから、それを整理して、それから全国の『事業所名鑑』に移ったんです。

だから、一番初めの階級構成というけれども、戦後すぐ、有産者階級と就業者群、失業者群、要保護者群、ロンペン、プロレタリアートという分け方を大ざっぱにやっただけ。それをちゃんと国調との関連で分析しようという意図だっただけのことです。

野沢 昭和23年の「飢餓線上の生活実態—要保護者のば

あい」の拡大というか、萌芽のわけですね。

大橋 それの具体化です。第1表の「国民の階級区分」というのをつくっている。これをもうちょっと国調で正確にしていただけたことだ。

野沢 国調で、例の職業別と従業上の地位、その2つの組み合わせを考えたのは、国調をにらんで、これで一番近づけるというか。

大橋 あれはILOの考え方だね。本当は、ILOの従業上の地位別分類とILOの提唱みたいなものだろうね。ILOをもっと具体化していけば、ああいうふうになると思うんだ。「国情記述」というか、「政治算術」というか、その一種だね。

野沢 このころ、ほかでこういう統計的な把握はいたしましたでしょうか。

大橋 1つは、大内さんの日本統計研究所の名前で出た。

浦田 『日本経済統計集』。

大橋 三渚さんなんかやっている。

浦田 あれはどこから出たのだろうか、国調とどういうふうに数字が合うだろうかというんで、お手伝いしたことがあるんですが、われわれの組み合わせのAB群ができたのは、そのときですね。33年くらい。

吉田 この表から考えたものですね。

浦田 あの本自体は、33年か、もうちょっと前かもしれせん。

大橋 そのころだね。

川口 田沼先生。

大橋 そろそろやり始めた。「経済評論」だったかな、「前衛」だったか、ああいうところでそういう雰囲気があっ

た。

川口 田沼さんのは国調で、ああいうものではなかったんじゃないですか。

大橋 そうだったかな。いや、堀江正規さんなんかやっていたな、あれは。

川口 岩波新書の『日本の労働者階級』。

大橋 あれは、あんなに機械的に整理したものじゃないようだったけれども、とにかく階級構成というか、階級論の具体化の方向から当然に行きつくわけだね。

野沢 先生のこの論文をきっかけにして、国調による組みかえ方式がスタンダードの方式として定着しましたね。

大橋 わりあいにながったね。あれには、レーニンのがあるし、毛沢東のがあるし、そんなつながりでしよう。

野沢 蜷川さんの「統計利用における基本問題」、あれにも1カ所「階級構成」という言葉が出てくるのです。「社会階級構成」ですか、特にそれとのつながりはない……？

大橋 別にありません。

野沢 この論文が出てから、岩波から新書執筆を依頼されるわけですね。

大橋 そうだね。

野沢 ちょうどそのころ、私も先生のゼミナールに入りましたが、その後、岩波の執筆に非常に精力を注がれて、その間、「経済論叢」に独占資本家層の実態分析を中心にしてお書きになるわけですね。それから、「戦後日本の社会諸階級と軍隊」というのが昭和40年にありましたね。

大橋 軍隊のやつね。わりあい大事なんだな。それは、三矢作戦があそこ出てくるわけですね。それで、防衛庁から昭和40年に、「研究資料借覧依頼の件」で、岸本英太

郎学部長の名で、僕が雇用問題と自衛隊の関係について、
自衛隊の応募者の前職、退職者の就職先別状況を統計に
よって研究しておりますので、資料を貸してくれと、正
面から借りに行ったんだ。それで防衛方から、

人事関係統計資料について

標記について、京大経済庶第11号(40.1.27)をも
って借覧方ご依頼がありましたが、本件につきまして
は、貴大助教授大橋隆憲氏に下記資料を提供いたしま
したので、ご通知申し上げます。

なお、資料のうち、取扱の如何によつては誤解をよ
ぶおそれのあるものもあり、内部では取扱注意として
いるものもございますので、この資料の取扱につきま
しては、部外への公表等は差し控えられますようお願い
申し上げます。

って来ているんだ。

それで、こっちからも返事を出して、文部大臣を通し
て断ってくれと出したんだな。(笑) それで、そのままこ
っちで出しちゃったんだ。そのとき、こっちからは、

昭和40年3月4日

防衛庁人事局人事第二課長

長坂 強 殿

京都大学経済学部長

岸本英太郎

人事関係統計資料について

先般は上記資料につき、当学部助教授大橋隆憲に借
覧の便宜を供与くださり、ありがとうございます。

つきましては、その資料は誤解のおそれのない事実

資料と存じますので学術研究の目的に使用させていただき、研究成果の一部を京都大学経済学会機関誌「経済論叢」昭和40年3月号に収載させたく存じます。この点をご諒承をえたくお願い申し上げます。

なお、上記措置にさしさわります場合はご意向を同封返信便にて至急お知らせくださるようお願い申し上げます。

と、出している。

こういうことをやって書いたやつが、この本だ。ちょうどこれは三矢作戦暴露したときの材料で、社会党なんかも、くれなんていつてきた。そういういきさつのあるやつなんだ。この後、わりあい軍事研究が、都立大へ行った佐々木隆爾君などで、かなり詳しくやられている。自衛隊の退職者の組織だけれども、軍事研究は、外部者でもやろうと思えば、不十分だがやれるという道を開いたみたいね。

野沢 そうして、自衛隊の内部資料を、入手と利用のぎりぎりまで追求して、分析されようとしたわけですね。それから、さっきの独占資本家層のところでは、事業所統計の個票を1つ1つ先生がチェックされて……。

大橋 有価証券報告書ね。

川口 それは三菱系統の分析のときにございました、有価証券報告書は。これは蜷川先生 of 古稀記念論文集に出された論文ですね。

大橋 ああいうやり方だったら、各財閥みんなやれて、日本の全体ができるんだろうけれども、慶応の野口さんがあとやられたのと違う？

川口 あれはたしか、社会政策学会で「報告なさるとい

うことだったんじゃないですか。

大橋 社会政策学会でも一度報告したね。ちょうどそのころ、社会政策学会では、日本女子大の江口さんが同じような階級構成をやっていて、同じような報告を出した。

野沢 日本労働協会雑誌に、1960年くらいにやっておられますね。

大橋 だから、ああいう研究、あのころ、わりあいに方々で出てきていたね。

野沢 その過程で、先生は、法人企業統計まで"広げ"られて、それをやはり、企業あるいは資本の分析に役立てようとされていますね。

大橋 法人企業統計も、個別資料に一々当たっていたわけだから。あれは有価証券報告書をかなり利用している。

野沢 大量的な官方統計と個別資料と官庁の極秘の内部資料まで入手して、多面的に分析されようとしたわけですね。

それから、49年になりますと、「現代世界の労働者階級」ということで、大変注目を浴びるんですね。そのご苦労話などをお伺いしたい。

大橋 あれは大変なことですね。人口統計とILOの『労働統計年鑑』、あの2つをばらしていつて、各国別に計算していくわけだけれども、あれはもうちょっと、レーニンなんかの「帝国主義論ノート」とか、国の性格づけ、あれをもうちょっとはっきりやっていけばいいわけだけれども、国の性格はなかなか大変なんだ。南アメリカとか、アフリカの個々の軍事政権の性質は、なかなか材料が得られない。京都にイギリスの図書館があって、あそこに政治関係のああいう速報資料があるので、これを

ときとき合わせたりしたけれども、とても個人でやれるような仕事じゃない。それを無理にやってしまったような形で、あれはやっぱり個人じゃ無理だ。何しろ資料集めが大変だから、外務省でやるとか、研究所でやるとか、かなり大ぜいの人間でかからないとね。無理しても、あの程度にしかできない。世界の階級構成表などナンセンスだという主張もある。確かに型の違った国々を、労働力と所得の指標で、いわば平均化してしまうのだから。

野沢 階級構成も、最初は先生が岩波新書に書かれたように、階級構成から階級対抗へと、全面的に対抗関係をとらえねばならないとおっしゃっている。それが最近ではだんだん研究も広がっていきまして、「新マル経講座」、昭和50年、これで1つの巻、第6巻で階級構成をやっておるのが1つの画期だと思うのです。先生が昭和34年に40周年記念論文で書かれたのが次第に広がって、いろいろな階層について、内部階層を統計的につかむということで、『マル経講座』の最終巻になって、共同研究が出た。

それから、最近の労働問題研究で、相沢さん、富沢さん、皆さんそれぞれ、労働者階級の内部構成、全体の構成を分析されまして、しかもそれを、階級対抗をつかむ1つの足がかりとして、研究を拡大しながら深化している。その先駆的業績をされたという点で、非常に大きな意義を持っていると思います。

大橋 それで結局、S. アミンの階級分析で、理論的には、搾取関係をきちっと、非常に単純化しているけれども、理論的な背景をきちっとやっていて、ああいう1つの方向、世界的視野の階級闘争とのつながりでやっている。これは五十嵐君にS. アミンの「帝国主義の階級構

造」の訳をやってもらって、ずいぶん早い時期に問題にし得たところだ。

野沢 先生の世界の労働者階級とアミンの世界資本主義の分析とが直結するわけですね。

大橋 ただ、分類が違う。アミンだとかロブ・スティーブンの考え方と、ちょっと分類の考え方、階級のとらえ方が違う。

アミンの場合、民科（民主主義科学者協会）で、ローザの考え方とのつながりへの言及があったようだが、あそこがはっきりしていない。レーニン、ローザ、アミン、それを整理したものはないかなと思って探しているんだけれども、一々勉強するの大変だなと思って。あれは民科の歴史部会でアミンを取り上げて、研究会をやっていたことがある。それに出ようと思っていたんだけれども、出そこなっちゃった。理論的な背景としては、もうちょっとアミンとローザのつながりを整理せにゃいかぬ、と思っている。

川口 先生がアミンに注目された直接のきっかけは、ロブ・スティーブンに対する批判みたいな形で出てきた研究があるんじゃないですか。

大橋 ロブ・スティーブンとは、アミンの方は直接関係がない。

川口 フランスのものの叢書になるわけですね。

大橋 はい。一応、そういうはやりというか、階級論のつながり、それを、フランスのトゥーレーヌというのが新しい労働者階級論書いてやっているんだけれども、原書が入らないんだ。だから、階級論、世界的にかなり整理されているような気がするんだ。

五十嵐 後進国の階級構成をやる場合に関係あったんじゃないですか、アミンは。

野沢 周辺資本主義。

大橋 うん。だから、本当はもうちょっと後進国の階級構成を整理するといいいんだけど、むずかしいんだ。土地所有関係だとか、古いのが残っていて、とてもとても、個人では簡単に整理できない。

川口 かなり大きな共同研究の組織がないと、大変ですね。

大橋 無理だ。個人では限界があるわ。

野沢 ハントを訳されたり、オソウスキーを紹介されたりして、かなり国際的な研究にも注意を払っておられますね。あるいは論争というような……。

大橋 階級分析の理論的な基礎をどう構築していくか。ほかの国の研究者がどう考えているか。特に、階級論ではフーランツァスなんかあらわれて、新左翼系の階級分析がかなり進んでいるみたいだからね。

川口 ちょっと、話もとに戻りますけれども、階級構成の研究とあわせていいでしょうか、先生は、再生産論に対するご関心がずっとおありになったようですね。私も、ゼミに入りましたのは昭和41年。ゼミでやったことを思い出しますと、ブレーゲリであったり、山田盛太郎をやったりして、全く統計学をやらなかったような記憶があるんです。土地制度史学会にずっとご関係を持たれたり、再生産論にご関心を持たれたりしたのは、いつぐらいからになりますか。

大橋 山田盛太郎さんが京都に来られるようになったのは、いつごろかな。

川口 立命館大学の非常勤の……。大体40年ぐらい。

野沢 もう少し前じゃないでしょうか。

川口 「産業社会」の出たのは、そのころですよ。

野沢 それは42年ごろですね。産業社会学部で特別集中講義があって、来られた。

大橋 そのころから具体的にやるんだけれども、階級論の基礎論としては、再生産論をきちっとしておかぬといけない。大ざっぱには、理論的な基礎として非常に必要なんだと思う。

吉田 山田盛太郎さんが経済企画庁からの受託調査で、戦後の再生産の構造をモデル的にずっと報告書を出す。それをコピーしてもらいましたね。あれは35~36年ごろじゃないですかね。

川口 さっき、戦後すぐ、国民経済研究協会で経済循環おやりになったときは、再生産論は意識されなかったわけですか。

大橋 そのころからは、再生産論的な考え方が強いわけだ。

川口 再生産論に関しては、相当前から……？

大橋 基礎理論として何とかせにゃいかぬなと思っていました。

川口 山田さんの「分析」なんか出た当時から、かなり注目されていたんじゃないでしょうか。

大橋 もちろんあれは出たときから。「改造」の『再生産過程表式分析序論』。

川口 それじゃ、戦前からのつながりで。

大橋 ええ。「資本論」が終わらず、暇がなくてやれなかったというだけの話だ。

川口 土地制度史学会に毎年お出になるようになったのは、40年ごろからですか。

大橋 山田さんに「出てこい、出てこい」と引っぱり出されたようなものだね。土地制度史は戦後すぐ、東京にいたとき、飯淵敬太郎なんかと一緒に少し勉強したりしたことがあったから。農村調査で、大將、病気で、結核かな、そのころ寝ていた。階級論といったら、そんなところだな。

木下 その辺に『統計学』35号、ありませんか。

大橋 社会経済分類は、「職業」と「従業上の地位」分類の組み合わせだね。階級表の組み合わせは、今度簡単にできるわけね。金さえあれば、フィルムで。あれは組みかえてもらったらいいんだ。いまの政府ではダメだからね。

野村 国勢調査の社会経済分類の基礎資料。

大橋 それと、階級構成の組み合わせ。

浦田 フィルムって、ああいうテープに入れたのを使ってという意味ですね。

大橋 あれは、中分類か小分類で、縦横の集計やれば、すぐ組み合わせできるし、機械で非常に楽になっているはずなんだ。あれが実際には使いやすくだろうな。選挙運動とか、いろいろなオルグ活動には。

浦田 日本で社会経済分類を発表するようになったのは、40年か45年ぐらいからね。先生の仕事の影響ということとは考えられませんか。むしろ、SNAとの関係はもちろんあるんでしょうけれども、何か似たような考え方を使っているという気もするんですけれどもね。

大橋 まあ、あれは便利だね。ああいうふうにやれば。

浦田 全く階級の考え方は違うけれども。

大橋 あれは国際的に問題になっているのと違う……？
国連の統計委員会で。

木下 『平和と社会主義の諸問題』というので、階級構成の分析がありましたね。

大橋 論争がずっとあった。

木下 『経済』でもシンポジウムがありました。

大橋 それがその次だね。『平和と社会主義』の次の段階で、それと同じようなことを『経済』の座談会でやった。

木下 60年から61年が『平和と社会主義の諸問題』で、62年から63年が季刊『経済』。

吉田 大橋先生の論文の後ですね。

大橋 それでずっと問題が一般化したというか、大ぜい関心を持つようになってきているわけですね。

階級論じゃ、河上さんと高田保馬さんが論争したり、階級否定を高田保馬さんがやるものだから、躍起になって、絶対、階級はあるんだという論議があるわけだ、戦前ね。

川口 季刊「労働法」の特集で、「社会学特集」読まれたことありますか。季刊「労働法」で社会学を特集して、その中で大橋先生の一連の業績を評価してあって、ここでは本当にひどいものですけども……。

野沢 いつごろ……？

川口 4～5年前じゃないですか。

浦田 社会学の方々が書いている。

川口 一応取り上げなければならないだろうというくらい……。

野沢 経済のアプローチと社会学のアプローチと、全然違うからね。



これからの階級構成研究に望むこと、ございますか、
 こういうことをやってほしいとか。

大橋 階級構成と階級構成のつながりをもうちょっとき
 ちっとしていかないと。それに、理論的過程と技術的過程
 の問題を意識的に区別すること。基礎論の方では、ア
 ミンミタいに搾取関係をもうちょっときちっとする必要
 がある。もう一つは、階級闘争とのつながり。それから、
 階級否定論がうんとあるんだから、これに対して、否定
 論の場合、実践的にも理論的にも、もっときちんに対応
 し、否定論を清算しなければならぬと思うな。

野沢 階級闘争のつながりというところでは、最近、富
 沢さんと伊藤陽一さんが共同論文を書かれて、そこでも
 提起はしているんですけども、まだ十分その分析に至
 っていないということでしょうが、大体機運はそちらの
 方に向かっている。

それから、階級否定論との関係では、いわゆる中産階
 級、中産階級意識というのが数年前に研究されて、
 それの実際をいろんな面から分析するというところで進
 んではいるんですけども、まだやっぱり十分ではない。

しかし、いわゆる中産階級というのも、最近の経済不
 況の中でかなり実態が出てきていますので、次第に社会
 学的な手法も入れながら進むのじゃないかと思います。
 ですから、末広がりというか、昭和34年の先生の研究が
 扇のかなめみたいになって、次第に広がって定着してき
 たというのが現状だと思います。

川口 社会学の方では、東大の庄司興吉氏が「経済評論」
 に載せておりました。あれは社会学会の報告らしいので
 すが、富永健一、尾高邦雄以来の系譜と大橋グループ――

「大橋氏ら」と書いてありましたが、この2つが階級研究の日本の大きな流れであって、それはいまや統一されなければいけない——統一ということとはちょっと違うんですけども、両方ともそれぞれのメリット、デメリットがあるという見方。さらに、アミンなんかの国際的な連関を入れてきて、転換せよというのが庄司氏のまとめですね。

大橋 富永健一というのは、あれはひどいね、唯物史観を否定し去ったつもりでいる。

川口 唯物史観もない。あれは、統数研が全面的に協力しているんですね。「日本の階層構造」のプロジェクト、第4次SSM (Social Stratification and Mobilization) の調査。

大橋 あんな官製的な次元だけで……。あれはひどいと思うな。「日本の階層構造」なんて、あんなのだったら幾らでも書けるし、猿の階級構成でもやった方がおもしろいや。(笑) あれよりは、猿や鶏や魚の住み分け序列といった生物学の方がおもしろい。

ロブ・スティーブンは、その後どうしているかね。ニュージーランドの学校、でき上がるはずだね。また出かけてくるんじゃないかな。

野村 ステータスの研究と意識研究と、両方ありますね。いまでも意識研究がはるかにおくれているんですか。

大橋 意識がおくれているだろうな。あいまいなんだよ、意識は。

野村 意識研究は、科学として成り立たないのですか。

大橋 成り立つと思うな。かつて、シャポアーフ『マルクス主義への道』という労働者の伝記があった。この

種の伝記の蓄積は、科学材料の収集ということになると思う。なお、社会意識の方か……？

野村 社会意識、階級意識ですね。

大橋 やっぱり、気分だの、考え方だから、客観的にとらえる方法がね。

野村 社会学の人は、その点いいんじゃないですか。

川口 富永さんのオリジナリティーは、方法自身にはなくて、むしろ国際的なプロジェクトとしてやっているわけですね。ほとんどアメリカの研究、ソーシャル・ストラテフィケーション手法が導入されていて、そこにはステータスを幾つかの指標で決めて、それはほとんど意識調査ですね。意識を調査して、5点法か何かで点数を刻んで、これは、例の中間層論争ですか、あのときに、岸本氏が痛烈にやゆしているわけですね。

大橋 あれはウォーナーなんかよりも、最近の論調はずっと退歩しているのではないか。アメリカの研究でも、階層研究は、もっと前の研究の方がしっかりしているな。

木下 「日本の階級構成」の最後は、京都の分析という形になってはいますけれども。

大橋 世論調査。

木下 何かやっぱり、京都なら京都におられること、それから、選挙の世論調査なんかやられたこと、階級構成をやらなあかんというのは、そういうのも関係ありますか。

大橋 関係あるし、いまのところ、京都で選挙を勝てるというのは、市長選挙だけれども、当落調査のああいう調査ができるかできないかに関係してくると思う。いま市政協力委員会なんか、調査能力を失っている。抜き取

りができない。抜き取りは可能であつたにしても、調査員が集まらない。各地区がつかめない。全然あの能力を失っている。

あ那个时候、たとえば共産党の梅田君と藤原君の2人が京都1区で当選したときは、票読みとつなげながら、当落調査もやってのける能力があつた。当時、京都の共産党の調査能力は、その程度に高まっていたと思う。そういう能力は、いまはなくなっちゃったんだ。僕は、やっぱり抜き取りができるような、しかも無理なく調査員を集められ、ああした調査ができるような状態なら、選挙にも勝てると思うんだ。技術的なことだけでなく、そういう組織力をいま失ったね。動員力を失ったね。効かないんだ。

吉田 先生が京都のことを書いておられるのは、京大の経済学部で記念論文集でも同じですね。最後は京都ですね。岩波はすぐ飛びついて、新書に載せてほしいといいました。岩波は統計があまり好きじゃない。最近『日本の統計学者』も、『学者と学風』に題を変えて書いてくれということですから、統計分析から、いまの言葉でいうと具体的な地域分析、それとの結びつきで岩波が飛びついてきたというような話をちょっと聞いたんですが、先生は、いまでいうと、地域での民主化というか、そういう問題に強い関心を持っておられて、何か、先生がお住まいのこの辺でも、昔から大分……。

大橋 ここでやったんだけれども、地域'のことはあまりやるもんじゃないな。(笑) にらまれちゃって、生活が不便になる。近隣の生活を乱すようなことをやると、ダメだな。

吉田　ですから、地域は選挙だけじゃなくて、地域闘争
 というか、そういうレベルでのかかわり合い、階級構成
 とそういう実践とのかかわり合いの問題かあると思う。
 われわれがあそこ来ると、先生、大きい紙に山を描い
 て、家１軒ずつ描いて、これを階級区分するんだって…
 …。(笑)

大橋　本来、そういうふうな組織で、地域からきちっと
 積み上げていけばできるんだ。大体選挙やる前にわかっ
 ちゃうんだ。高山さんが生きていたとき、婦人会や市政
 協力員を使ってそれをやっていたんだものな。一時、市
 政協力員の会が、高山選挙の推進部隊みたいになってい
 ったんだ。ああいう能力をみんな失っている。地域分析を
 書くとしても、あと10年、完成はまずダメだね。

野村　どうもありがとうございます。

階級構成の問題は一応これで打ち切って、5分間休憩
 しまして、障害者福祉の問題を中心にした社会福祉の問
 題、最近数年間の先生のお仕事の内容をお聞きしたいと
 思います。

野村　先生がこの10年間、一番最近のお仕事として力を
 注がれました社会福祉の実証的な研究、特に障害者問題
 の実証的な研究の先鞭をつけられた幾つかの問題につい
 てお聞きしたいと思います。

質問も、大阪府立大学社会福祉学部の奈倉さんにお願
 いいたします。

奈倉　大変不勉強でございませうので、逐次ほかの先生方
 から質問を補っていただきたいと思います。

大橋先生が京大を定年でおやめになった後、社会福祉

学の教育に携わられたお考え、特に、日本福祉大学をお選びになったあたりの事情をまずお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

大橋 それは、具体的には見田石介さんに勧められて行ったんだけど、それよりも基本的には、さっきいったように、戦後、それから戦前段階、私の15年区分説によると、戦後の性格を規定して大事なものは、一番初めの敗戦と農地解放の15年間じゃないかと思うんだ。そのころというのは、やっぱり敗戦、戦争に対する考え方、戦争と平和、浮浪児がいっぱいいたわけで、社会福祉の当然の問題として、貧困の問題、戦争の問題、平和の問題というのはつながっていて、反戦運動というようなことも結構だけれども、それよりも、実質的な反戦なり戦争に対する批判というのは、やっぱり社会福祉の問題で、しかも、障害者福祉の問題が一番具体的で大事なことじゃないかと思うんだ。障害者福祉の問題は、内容的には一番つらくて大変なんだ。第1段階ではっきりしているように、このところをしっかりと押さえていないと、反戦運動もフソもなくなってしまふ。障害者福祉の問題はその点が大事だと思って、障害者問題をきちっとするということも考えたわけです。

一番初めに、戦後すぐそういう問題にかかったんだけど、京都へ来て、統計学などをやっていたものだから、当分離れてしまった。もう1つは、精薄の問題は、もちろんどの障害者問題を見ても、統計の方法の観点から統計による把握が実に弱い。経済なんかだったら、当然、形式的にしる統計の吟味、批判を通して利用するということになるけれども、障害者統計ということになる

と、厚生省の統計全体にそうだけれども、吟味、批判は欠如しているんじゃないかと思う。また、吟味、批判は大変だけれども、これ抜きに統計らしいものをすぐ利用する。そういう意味で日本の障害者問題は、障害者統計というもので、非常に大事な基礎のところが抜けているような気がする。世界的にそうじゃないかと思うんだけど、そんなので統計の問題としても大事だと思うし、実質的な反戦運動というか、そういう問題としても大事だと思うんで、障害者問題を選んでいったということになるわけなんです。

奈倉 先生の論文を読ましていただきますと、「経済学における価値論」の中で、障害者労働をどう位置づけるかということが、まだ非常に不明確だということもお書きになっていらっしゃるのですが、そういう点からも、社会福祉の中で特に障害者問題を先にお取り上げになられたと考えていいんでしょうか。

大橋 理論的に障害者と健常者と分けて、「価値論」の中で、障害者の労働についてどれだけ問題になるかわからぬけれども、やっぱりそこは抜けていると思うな。マルクスなんかでも、健常者の平均的労働で、障害者というのは、その剰余価値部分の分配部分で養われるという形の論理構成だと思うんだ。そういうのだったら、障害者というのはお客さんなんで、人格というか、そういう点では普通の健常者、普通の人間と外れているような位置づけになるんじゃないかと思う。そういった点は、倫理学と教育学なんかで発達保障とかいうし、法律では人権を問題にするけれども、経済学の問題として、障害者の位置づけがはっきりされていないような気がする。

再生産論なり何なり、障害者を入れたら、平均的な価値は上がってくるんだけれども、そこはどういうふうにするか。それから、必要に応じて分配するという考え方と、労働に応じて分配するという考え方をどうしていくか。社会主義社会で、そこらはどう考えているのかと思っているんだけれども、そういう意味では、どうもまだ障害者問題の位置づけが、経済学の中ではっきりしてないような気がする。位置づけするにしても、法律理論を借りたり、教育理論を借りたり、ほかの論理を借りて、それ以外に経済学ではしようがないのかもしれないけれども、そういう論理構成になっていると思っています。

奈倉 社会福祉学の立場でいえば、人権視点に立ちますから、障害者問題は重要だ。障害者に対してお金がかかるのもあたりまえだと割り切ってしまうのですけれども、それは非常に経済状態のいいとき、財政状態のいいときは、その理論が通りますけれども、非常に厳しくなってきますと、吹っ飛んでしまうわけですね。ですから、もう少し違った立場から、障害者問題の位置づけをしなければいけないと思うのですが、そういう点で、先生が経済学を踏まえて、なおかつ社会福祉の障害者問題をとり上げていただいたということは、社会福祉研究の面からも画期的なお仕事だと思うのです。

大橋 そのこのところ、池上惇君たち、何かやっているのと違う……？ 経済障害者問題。

野沢 人間発達の経済学をやっておられる。

大橋 どういうふうに定義しているかな。

川口 大月書店の「今日の日本資本主義講座」の池上先生の編集された第9巻、「国民生活」という巻で、小沢修

司君という若い人が障害者問題を取り上げているのですが、大橋先生を引用しています。

大橋 生活構造論なんかで、きちっとしておかにはいかぬのじゃないかと思うんだ。実践の問題だと、フランスの1968年の5月事件、あれはちょうど1年前の8月に、フランスで医療の経費がかかり過ぎるので、法律で医療の抜本改正をやっているんですね。それに対する反対運動が、フランスの場合、分裂している組合が全部そろって反対闘争をやっているんだ。それで1年かかっている。そこに学生騒動が起こって、それが火つけ役になって、バツと組合の方の力まで巻き込んで、むしろ中心になったのは組合と違うか、68年の5月事件は。それで、ドゴール体制がひっくり返っちゃうという形になっていくんじゃないかな。

日本なんかでも、今度はちょうどいいんだ。といっちゃ悪いけれども、福祉切り捨て、これはやはり組合できちっと位置づけて、きちっと長期の闘いの態勢を組むべきだと思うんだ、何かその場限りの闘争じゃなしに。僕は、フランスの例というのは非常に教訓的だと思うな。フランスだけでなく、福祉切り捨てをした場合に、どういうふうになるか。やっぱり、闘争をきちっと組んでいくいい機会というか、大事な問題じゃないかなと思っている。それは理論的にもそうだし、実践的にも大事な時期に差しかかってきたんじゃないかなという気がするのです。

奈倉 少し観点を变えて、障害者統計という面からお聞きしたいと思うのですが、蜷川先生の追悼論文の中でもお書きになっていらっしゃるように、障害者統計は、大

量の4要素が非常にあいまいだ。ですから、当然量的な研究の前に、質的な面の研究が前提となるということをおっしゃいましたし、そういう点で障害者統計を根本的に考え直さなければいけないということと、それから、調査方法も非常に問題があると、2点ご指摘になっていらっしゃると思います。

特に、質的な面の研究については、障害ということの定義が、いままでの日本の調査などで行われた、impairment(身体器官の障害)とか、disability(機能障害)といった面から障害を見るのではなく、WHOも提唱していますけれども、handicap(社会的不利)という面から見ていく。そういう点で、先生がhandicapの評価法について、障害統計の立場から見解をご発表(『障害者統計と「社会的不利」』東京経済大学学会誌125号、1982年3月)いただいたことは、これからの調査に大きな影響を与えようと思うのです。実際にこれからそういうような調査を組んでいく場合、どういうことが問題になるか、どういうことをさらに研究していかなければいけないかという将来の問題も含めてお教えいただきたいなと思います。

大橋 WHOでhandicapの大事さを主張しているんだけど、結局、内容的にはどうもhandicapになっていないんですね。どうしてもdisabilityの方に近づいちゃうというような形で分類がされているんです。そういう点で、これは草案だから、これを足がかりにして、もう一度共同でみんなをよくしていけばいいんだと思いますけれども、こういうスケールをみんなで作ってみるという形で、どういう指標をとったらいいか、これを決めて

いかなければいかぬと思うのです。

福祉大で、ちょうど名古屋の南の方の地区で、障害者調査をやっているところです、作業所建設のために必要なこととして。名古屋市の方では材料を出してくれない。ヘタに出すと、出したということでは上げを食うんで、独自にやれとって、協力は得られないわけだけれども、福祉大の大学院の諸君が調査をやっております。それをちょっと手伝ったんだけど、できるだけhandicapの点で指標をとるように気をつけたいということ。

その前に、抜き取りが問題になってきているのです。試みとして名古屋の福祉大の調査はもうすぐ集計できると思いますけれども、handicapの指標の設定がなかなかうまくいかないのです。

奈倉 どうしても障害を持っている人だけに目がいてしまいますと、disabilityしか浮かび上がってこない。handicapは、環境と障害を持った人との関係ですから、環境問題にも目を向けた標識を持たないと、ちょっと無理なんじゃないかなと思うのです。

大橋 そういう意味じゃこれからですね。みんなで寄って指標をつくっていくという仕事は、世界的にもこれからだと思うのです。WHOがこういう状態ですからね。

厚生省は、来年の3月末までに、これの翻訳のきちっとした文書を出すといっているんですけども、どういうふうになるか。今年度予算で組んでいますから。それが出れば、標準的なWHOのhandicapの評価法全体の解説が、impairmentからずっと続いて一応出るわけですね。みんながもっとわかりやすくなると思うんです。

奈倉 障害者統計はいろいろな面で不備というか、批判

されなければ"ならない面があるわけですが、統計方法の面でのいろいろな不備を、先生は単に抽象的に批判するんじゃないで、むしろ具体的に先生自身が調査なさって、これを府県別の障害者概数調査（日本福祉大学研究紀要52号、1982年6月）というのでお出しいただきました。こういうような具体的な調査を通して、方法論の批判をしていてくださるのだと受けとめていますか、先生もそういうようなお考えでしてくださっているんでしょうか。

大橋 できるだけそういうふうにはしたいと思っているわけですが。これは一応やったけれども、問題を広くやるとできないから、精薄中心にやりたいと思っているんです。

ところが、なかなか精薄の問題はわかりにくいというか、むずかしいというか、調査も、結局出現率なんていうと、正規分布を前提にしないと、うまく全体がとらまえていくんだね。そうすると、やっぱりこういうところにぶつかると、正規分布というもののかなり重要な位置を持ってくるような気がするんだ。いままでの数理統計学批判では、正規分布を攻撃してきたんだけど、実際の利用となると、正規分布にぶつかってくるんだ。限界はあるけど、正規分布でも想定しないと、全体の出現率の規定はなかなか困難で、これなしで全体を規定していくのがむずかしい。

それから、いまちょうど「京障連」(京都障害児者の生活と権利を守る連絡会の略称)の仕事をやらされているんで、そこで障害者調査をやらざるを得ないような状態になってきている。それも、少しもお金はないんだけど、やっていこうかと思っているんです。少し聞いて、いろんなところで研究費の補助の募集があって、出せる

ところはみんな出してみただけけれども、「京障連」にはどこにも出してくれない。(笑) それはどうしてかということ、法人ではないからで、いつつぶれるかわからないようなところへは出せない。出しているところは、みんな社会福祉法人、学校法人、社団法人などの法人格を持っているところなんだ。

もう一つは、こういう民主運動というか、京都府でも蜷川選挙を応援するようじゃ、補助金は打ち切りということになったみたいですね。杉村敏正さんを応援すると、補助金というか、援助は打ち切る。そういう中でやっていくよりしょうがないんだから、やっていく予定ですけども、實際上、調査活動は実はそういう障害者とともに歩む実践組織があるからやっているんで、道は自然に開けていくんじゃないかという気がする。

奈倉 あと教育問題なんですけれども、先生が社会福祉教育に打ち込まれて、教育の方法の中に統計調査を導入してくださったということですね。社会福祉教育では、見学とか実習とかありますけれども、実際の統計調査をするという実習はあまりない。社会福祉も実証的な科学でなければいけないというので、統計数値とか実態調査を重視はするのですが、現実には教育の中でそういうものがやられていない。それを先生が実際の方法を示してくださったので、社会福祉教育に与える影響は非常に大きいと思うのですが、実際そういうこともお進めくださっている上でお感じになっている点、お話しいただけないでしょうか。

大橋 やっぱり戦前の社会調査は、社会福祉のための社会調査なんです。大体、社会調査というとそうですね。

それが統計の方では皆抜けちゃって、何か数理的な操作になっているし、それから、社会調査もサンプリングになると、どうも「社会福祉のための」というやつが抜けちゃうような状態が一般的な状態になっている気がする。

戦前の日本の社会調査の歴史、それから日本だけでなく、ほかの国の社会調査は、皆きちっと整理して紹介していく必要があるという感じを持っています。従来の社会調査、もとは社会福祉と密着していたやつですね、みんな貧困調査。

それが第2期の高度成長、高度蓄積の15年間の過程で、貧困とか反戦とか、大事なものが次第に抜け落ちてきている感じがします。だから、なおさら初期の15年の大事さを痛感します。次第にもとへ戻っていくと思いますけれども、まだ高度成長の余波が強くて、反核あれと脱反戦状況が意識されていないような気がする。社会福祉(貧困・反戦を含む重厚な社会福祉)のための社会調査という目的意識をきちっとする必要があるような気がします。

奈倉 本来は、社会学の方がそういうことをもっと考えてくれていいと思うのですが、社会学の方が案外社会福祉のための調査とか、社会福祉の基礎になるようなものを提供してくれてないんで、そのように私は受け取っているのですけれども、それを経済統計、社会統計の側から具体的な方法がどんどん提示されるということは大変ありがたいと思っています。

大橋 日本の場合、それは高度成長の間に大事なものが抜け落ちていく、悪くなっていくんじゃないですか。アメリカ流の「安上がり」で「科学的」なものが入ってきて、皆そういう基礎論というか、ジャーナリズムという

か——ジャーナリズムといったのでは足りないと思うけれども、大事なものがみんな消え去っていくという感じを受けるのです。

奈倉 最後に、昨年の学会報告のことなんですが、日本仏教社会福祉学会で、仏教教団が社会福祉問題、特に国際障害者年の行事にどう取り組んでいるかということの調査研究をご発表になったように承っております。私は記録を手に入れておりませんので勉強できなかったのですが、こういう調査をなさったその意図とか、あるいは仏教教団に対して何らかの社会的役割を期待してそういう調査をなさったのか、あるいはそうではなしに、宗教批判の1つの調査としてなさったのか。特に、先生が一番最初にお若いころにご研究になった宗教社会福祉の研究とも、あるいは関連があるのかなと思ひまして、この研究発表についてお聞きしたいと思います。

大橋 資料を差し上げますけれども、キリスト教と仏教を比べると、仏教の方が、お寺の数にしても僧侶の数にしても10倍なんですね。ところが、精薄施設を比べますと、全然キリスト教の方が多くて、仏教の方はまるでないのです。それを1つずつちゃんと調べて、数も出しているんですけれども、そういう形で、仏教の方はまるで「精神」というか、口ではいうけれども、全然いけないような状態だと思うのです。

特に、京都なんか見ていると、お寺がいっぱいあるんです。それをつぶして駐車場にしちゃう。(笑) ここを利用して、障害者共同作業所をつくろうじゃないかと盛んに勧めたりしているが、それを承知してくれる寺も1、2カ所はあるんだけれども、それを聞かずに、お寺をつ

ぶして、儲かる方の駐車場になっちゃう。こういうのを町の人は皆見ている。もっとそういう寺は、みんな地域の住民によって支えられて、地域の人たちがつくり上げた寺ですね。それを全部、戦後の農地解放や宗教法人法改正を経て、私物化して、勝手なことをやっているわけなんだ。

それで、「福祉はイエス様へ、お金儲けはお寺様で」という題目で話したら、すぐ新聞社が飛びついちゃった。(笑) それが新聞に出ちゃったんで、西本願寺がまいっちゃった。その後すぐ、宗門の福祉大会をやったんじゃないですか。あんな新聞出されちゃって……と、しばらくたってから本願寺から文句が来ましたよ。

実際問題として、仏教教団の場合、統計で精薄関係の施設を見る限り、全然話にならない。ただ、仏教教団の場合でも、浄土宗が一番一生懸命やっているんです。それから浄土真宗。要するに浄土系ですね。ほかの宗派はまるでダメです。金儲けばかり。

その学会での配付資料を差し上げましょう。統計が載っています。これは、300以上の檀家を持つお寺の宗務方に全部電話をかけて聞いたり、後から資料を送ってもらったり、いろんなことをやったんです。社会福祉の施設は、「大法輪」にずっと仏教系統は載っているのです。カソリックの施設がやっぱり相当多いですね。キリスト教幾つでしたか、ちょっと資料を持ってきてみます。

【「国際障害者年仏教教団の障害者施設数一覧」提示】

僕は、仏教にあまり期待してないんですがね。(笑) したがつて、仏教批判の意味がかなり強いけれども、もう一つは、いま行っている花園大学、ここはわりあいに学

生が思い切ったことをやるものだから、寺を開放したり、
 こういう施設をやる可能性があるのです。少数でもそう
 いうお寺を開放することに期待してはいるんですが、そ
 ういう学生がいるので、手伝うつもりなんです。これが
 主な理由です。

仏教関係の施設が38ですか、精薄関係の仏教の全施設、
 定員が2267名になっています。それに対して、キリスト
 教は57ですか、3216。そのうち、カソリックが20もある
 のです。こういう統計があります。これをどうぞ。

奈倉 どうもありがとうございます。

大橋 それから、「大法輪」に「仏教関係の社会福祉施設
 一覧」というのがございまして、それに対してこちらは、
 「ジュリスト」に出たやつが1つ。あと施設名簿調べて
 全部数えたわけです。

川口 関連して、障害者調査で、前から非常に大きな問
 題になっておりますプライバシーとの関係、これは先生
 は結局どんなふうにお考えになっておられるのでしょうか。

大橋 プライバシーは、やっぱり調査者が行政でやる場
 合は、行政と被調査者は対立してくるし、問題が起こる
 と思う。それから、行政では、わざわざめんどう見てく
 れもしないところというバカいやせぬから、あまりはっ
 きりしたことは調査できないと思うのです。

しかし、そういう障害者団体の障害者の利益を守って
 闘う人たちが、自分たちの組織のために調査をやるとい
 う調査の場合、相当協力してくれると思います。そうい
 う場合には、プライバシーの問題はもちろんあるけれど
 も、ずっと協力を得られるし、それを裏切らないように

やらないと、二度と調査に行けなくなると思います。

川口 基本は、行政に対する不信であるということですね。

大橋 そうそう、不信ですよ。だから、そういった点で、障害者団体は相当きちっとしていかなければならぬし、プライバシーの問題も、はっきりにした考え方を持っていていかなければならぬし、拒否権もきちっと認めるような形で、あらかじめそういうことをいって、いいたくない問題はいわなくていいような形で調査していかなきゃいかぬ、そんなふうを考えているのです。

木下 ことしの学会でいわれましたけれども、報告の最後の方で、病院でもお聞きしましたが、甲乙丙丁、甲種合格とか、そういうふうなのか、戦前からいまでもずっとあるんだって……。

大橋 軍事編成になっているんだね。

木下 あれと階級構成と関係ないのですけれども、何かその辺の考え方としては、やっぱり非常に似ている。

大橋 同じだと思うな。特に、福祉労働者の組織で、公務員福祉労働者は、少なくとも、人事院勧告であやふやといえども、生活は守られている。普通の公務員よりは不利であろうけれども、それでも、公務員福祉労働者は上層だから甲種。それから、社会福祉法人という形をとっておれば、法人の定款があるし、その限りで施設長のいろいろな意見が入り、公務員労働者よりも、あるいは悪いかもしれないけれども、若干安いとはいいいながら、大体同じような形で乙種、そんな悪くないと思う。

それから、その下にあるのは無認可施設、共同作業所みたいなところ。これは、雇用労働者とは認めてないん

だ。つまり、共済組合も何もない。保険もきかない。給料は大体10万程度、いくらよくても大卒で12万。これは若いうちは勤められるけれども、長く勤められない不安定就業者だから兩種。共同作業所は1000近くになってきているんじゃないかな。現在630とかなんとかいわれているけれども、それは精神障害者の施設は抜いての話。そういう意味で、無認可共同作業所の福祉労働者というのはさらに悪い。

それから、在宅障害者のめんどうを見ている人の働きは、福祉活動として世話しているわけだけれども、主として主婦になるのかな。障害を持つ亭主や親のめんどうを見ていくという形。現在も、ホームヘルパーだなんだと、制度、メニューはいっぱいあるけれども、実際はほとんど機能しないような状態である。自分で人を雇うとなると、普通に給料入ったって、とてもとてもかかって、これはマイナスが出るに決まっている。そういうのは丁種というか、生活労働条件、福祉労働の大変さがある。

そういう形で、働く場所によって、ずいぶん福祉労働者の格差があって大変だと思う。そういう構造を持っているんじゃないかね。福祉労働者の3層構造というか、4層構造というか、労働者にならないけれども、家庭の主婦、家族従業者、広い意味の福祉労働者は、そんな構造を持っているんじゃないかと思うんだ。そういう点で、これはみんなきちっと分けて、一体、どの程度の人間がどの程度要るかというやつをきちっとしなければならぬと思うんだ。それがいいかげんで、何が福祉行政かというのを「週刊新潮」かなにかにずっと前に出した。そういう状態がまだずっと続いている。

だから、こういう点では甲乙丙丁、軍事組織が、障害者の系列もそうだし、階級構成もそうだし、福祉労働者もそうだし、みんなあるという感じがするんです。そういう構造になっているから、障害者を抱えている家庭の崩壊というのは、これはもうちょっときちっとしなければいけないと思う。障害者家庭の崩壊、生活保護法だの、ああいう形から、そんなふうを考えているのです。

野村 どうもありがとうございます。

障害者の福祉と障害者統計について、最近の先生のご研究のお話は一応これだけにして、ちょっと休みましてから、先生が個人でいままで50年間おやりになってこられました社会活動、それから、個人として非常に印象や思い出の深いお方2～3人、あるいはもう少しいま頭の中でお考えのことをお伺いさせていただきたいと思います。

野村 それでは、いままでの先生の半世紀の個人的なご生涯の中で、いろいろな社会的な活動、民主運動に携わってこられたと思うのですが、そういう中で、先生として印象に残っておられる事柄を少しお聞きして、それが終わりましたから、先生個人として、非常に印象、感銘の深い人の思い出をお話ししていただきたいと思います。

まず初めの問題から、質問してもらいますから、よろしく願います。

川口 私は、主に戦後ということでお聞きしたいと思うのですが、戦後すぐの民主主義科学者協会経済部会のお仕事を、先生少しなさっていたように思うのですが、そのころの思い出を……。

大橋 民科は、小倉金之助さんが委員長、その後、末川博さんが会長をやる。僕が京都へ来たのは、昭和24年だね。そのころ、末川博さんにしょっちゅう呼び出されては、いろいろなことをやっているわけだ。一番先は河上さんのお墓をつくることで、京都朝日会館の一番上に「アスカ」というレストランがあって、そこに呼び出されたことを覚えている。そのころから民科の仕事を主にやってきたわけだな。

それも、東京の方は、世界科連の窓口になっていた。柘植秀臣さんがやっていて、民科の後始末、東京の方やりかけて、それで京都の方でそういう関係の仕事をやっていたんだ。

川口 東京のころからもうされていたんですか。

大橋 東京のころから民科の仕事をやっていたわけですね。そのとき、民科の哲学部会なんかで、サンプリングが社会主義の方法だなって、そんなのおかしいじゃないかというようなことをいっていた。

民科で一番大事だと思ったのは、京都でつぶれるとき、あと科学者会議に切りかえなければならない。その切りかえの仕事と北京シンポジウムの仕事をしていた。井上清さんだのみんな中国に行ったんだけれども、外務省だの文部省に友達がいたから、ビザの世話をしたりなにかして送り出し、北京シンポジウムの実質上の裏の仕事を大体やっていた。民科の経済部会のつぶれるころに、民科の京都支部長か何かやらされていた。そのときつぶれた。

川口 民科の全体の裏方みたいな感じで、民科経済のチームではなかったのですか。

大橋 民科経済もやっていたけれども、全体の裏方みたいなことだな。

川口 民科経済は、京都ではどういうことを……。民科は、法律、歴史、あるいは哲学は、それぞれ歴史もあり、現在も細々続いていますか、民科経済は一番先につぶれたみたいなのところがありますね。それは、どういうことをおやりになっていて、なぜ一番初めにつぶれたんですか。

大橋 どうしてかな。

川口 何か研究会のようなことをやっておられたんですか。

大橋 研究会をやっていたけれども、やっぱり研究体制が、経済の場合うまくできてなかったな、京都では。それでも自然科学の方は生き延びて、全体として活発だった。経済はどうしてかね、あまり活発ではなかったな。みんないろいろなことをやって、忙しかったことは忙しかったかもしれない。

初めの間は、結局、河上精神だ何だかんだって、初期の15年間はいいんだけれども、高度成長になるとダメなんだ。意識がぼ"やけて、高度成長ぼ"けというか、ぼ"けちゃうんだ。そこへいくと、自然科学の方の連中は、高等学校の先生なんか大ぜい組織して、もっとじみちなことをやっていたね。経済の場合は、大学の教師ばかりだった。はでな活動やっていたけれども、地盤が非常に狭い。それで簡単に崩れちゃうんだな。

川口 もう一つ、先生の戦後の京都民主運動の関係でいえば、何とんでも蜷川知事と、とりわけ選挙を中心に、学者、宗教者、文化人なんかを中心にした活動があった

ように思われるのですが、さっきお聞きいたしますと、知事選挙は最初から世論調査を取り上げたようですね。私たちが全面的に参加したのは、70年の知事選挙ですが……。

大橋 それでも、特別に調査をやらなくてもはつきりわかっているようなときはやってないな。

泉 この6月にみんなでやった先生の古稀祝賀会の先生のあいさつの中で、70年の世論調査は非常に重要な調査であったということをおっしゃいましたね。どういう意味で重要だったんでしょうか。

大橋 あれはやっぱり、蜷川さんの組織力が一番高まったときと違うかな。共産党の一番力のあったときと違うかな。それからだんだん抜けていくわけだな。七十何年か、高度成長ももうちょっとたつと終わるんだね。石油ショック、あれから高度成長終わって、下がっていく。それにつれて、力が下がるんだな。

野沢 世論調査をやって、サンプリングを使いましたね。従来のサンプリングの評価の流れの中で、あのサンプリングの評価はどのようにお考えでしょうか。つまり、やってもよいというふうに……。

大橋 やってもいい。個別調査で、個々のあれが出るんだな。無手勝流よりも、個々の地域地域の特性が間接的につかめるということとはプラスだ。地区別に、ある程度の見通しは立つな。何もやらずに勘でやるよりは、あの方がずっと科学的というか、調べた上での対応ができる。

泉 経済統計研究会の中でのサンプリングの評価は、かなり新しい評価をもう一度やり直すべきだという意見が出ましたね。

大橋 実践的な意味ではね。抽象理論的には、それは同一物が多数箇の集団を前提としているので、同種多数箇の集団も前提とはしていない。つまり、単一標識集団と無限多様な標識集団を常に同一視してよい、という迷信(ケトレー式)の上に立っているわけだ。もっとも、実践的には、階層分けがあるかね。(笑)

川口 あの後、結局、野沢さんとの共同報告、経統研で一度あり、木下君も報告をしたということで、あれをきっかけに、経統研に新しい標本調査論争を持ち込んだという意味では、大変画期的なものだったと思うのです。

大橋 実践的な意味やね、むしろ理論的というよりも。

野沢 実践的には否定できないということですね。

大橋 それで、今度正規分布をやろうというんだから。

(笑) ちょっと飛躍だよな。

吉田 自然現象といいますか、そういう領域では、正規分布に近似した度数分布を示すことが非常に多く見受けられることは事実です。特に、生物学の実験なんて、条件をコントロールしてやった結果なんか、かなり一致するわけですから、そういう根拠をどこまで見出せるかの問題じゃないですか。

川口 一種の出生性比に近いところがあるかもしれない。多数の出生の中で……。

大橋 いろいろな条件があるからね。

川口 いろいろな条件の重なり合いの中で……。

大橋 それかみんな反対のやつが相殺してくれればいいんだけれども。

吉田 そこのところが、かなり層別というか、そのあたりがきちっとできてないと、一見正規分布風な条件でも

動物的側面だけでなく、社会現象でも、実際の大都市の、ある駅での乗降客とか、そういう現象は、かなりある種の確率分布に近似することが十分あり得る。

大橋 いわゆる大量現象だな。その理屈がどうもはっきりにしない、経験的に。

吉田 それ自体の社会現象という考えというか、社会現象化と叫べたら、あまりそういうのとは関係のないところで、そういう事態が起こる。

奈倉 大橋先生が、障害者調査の論文で、正規分布のことをお書きになっていらっしゃる。こういう利用の仕方もあるという意味なんです、精神薄弱者の知能テストで、IQで線を引いて分布する。そのことがいかどうかはさておいて、その場合に、当然、重度の人が何人、それから軽度の人何人と数えられるんだけど、それが、重い人はわりあいちゃんとつかまえられる。軽いところはあいまいにされて、抜け落ちちゃうというんです。抜け落ちているということを科学的に予測する方法として、正規分布しているかどうか見て、正規分布していない、だから、これは軽い方が落ちている。そういうことで、知能テストなんか正規分布するんだし、非常に大事な予測のための、予見のための手段として、正規分布を参考にしていられませんか、私は理解しています。

大橋 だから、あまり機械的に復活しようとは思ってないけれども、何か方法を考えないとね、出現率なんか。

泉 これは、「8000万人」の論文書かれたときも、内海先生のあのころの論文ありますね。お二人は、やっぱり違うと思うのです。先生は必ずしもあのとき全面否定して

いるわけではないと読めると思うのです。そういうもと
 ごとのお考えがあって、世論調査をきっかけとして、も
 う一度きちっと考えてみようということになさったんじ
 ゃないかという印象を受けるんです。

大橋 いや、その正規分布のところがよくわからないん
 だ。因果関係だの、そういう形がどう理解していいか、
 形式的にはわかるけれども、内容的な意味が……。

吉田 IQというのは、かなり人為的なあれですし、果
 たして自然的な側面の能力を客観的にとらえているかと
 うか。

奈倉 IQで切ること自体、問題があるな。

吉田 という気がするのです。

奈倉 仮に、そういう手段で見るとしても、脱落してい
 る、本来対策の対象になる人が、福祉の対象から外れて
 いる、その点を強調なさっている。

野村 第2番目の問題として、先生の個人としての思い
 出をお尋ねしたいと思います。

第1番目が、人物評伝の思い出。一番ご生涯で印象に
 深い方々、先生にとって神様に近い方は横に置いておき
 まして、そうでない、わりあいお年の近寄っている先輩
 や後輩というところを……。

大橋 やっほり、経済学者では矢内原忠雄さんじゃな
 いかな。戦争に対して一番きちっとしていた人はね。そう
 いう意味じゃ、はっきりしている。

泉 直接ご関係があったんでしょうか、矢内原先生とは。

大橋 直接関係はないけれども、東大で先生はやってい
 るし、京大の40周年記念にも来て、アダム・スミスにつ

いて講演しているし、そういう形で、結局、内村鑑三さんなんかの影響を受けているわけだけれども。社会福祉の人たちは、戦争でできた子供の浮浪児なんか、一所懸命に世話するけれども、戦争そのものに反対してないんじゃないか。社会事業で一番大事なことは、反戦運動なんだ、戦争をやらさぬことなんだということが、内村鑑三の意見だ。そういうのをまともに引き受けているのが矢内原さんで、それはもう戦争中でも公然と、教室で、兵隊がいようがいまいがやっていた先生はりっぱだったな。

やっぱりあれは宗教というか、考え方のバックがあるわね。京都の経済学には、そういう人いないんだね。河上先生も、偉いことは偉いけれども、宗教的な問題になると弱い。宗教的真理とマルクス主義と書いているけれども、宗教のとらえ方というか、逃避しちゃう。そのあたり、矢内原さんの方は、やっぱり宗教を持っているせいじゃないかね。社会科学とキリスト教の関係をきちっととらえている。神がかりといえは神がかりだけれどもね。そんなわけで、矢内原さんは偉いなと思うね。

もう一人、秋田雨雀さんという人も、相当偉いと思うな。秋田さんはあの時期に、無神論者同盟の責任者を引き受けたし、戦後は、青年劇場建設の仕事をした。渋谷定輔さんは、農民運動家だったが、やっぱり詩人だね。いまも健在だ。

泉 あのととき先生にお伺いした話で、先生が2人の非常にすぐれた先生を持っておられたことが、先生の非常な幸福であったということ、蜷川先生と山田盛太郎先生、お2人非常にすぐれた先生を得られたことが幸福であっ

たということをおっしゃられたのをよく覚えているのですが。

大橋 直接的にはね。

泉 蜷川先生は非常に個性の強い人ですから、プラスの面、マイナスの面、いろいろあるかと思うのです。先ほど、しかられたという話をお聞きしたのですが、もしそういうことで、もっとお聞かせ願えることがありましたら何か……。

大橋 蜷川さんのことは、女房の方がよく知っている。

(笑) そういう点ではやっぱり、個性相当強いけれども弱いね、矢内原さんあたりに比べると。

吉田 『日本の統計学』で、矢内原忠雄による戦争中の学者の分類で、蜷川さんを位置づけていますね。

大橋 矢内原さんがしっかりしていたことは、だれでも認めるだろう。格段の違いがあった。やっぱり、あれはキリスト教の無教会派だからでしょう。それで、仏教に対して、仏教というのはざんげはする、悔いる。戦争負けた後、悔いた。しかし、改めない。悔い改めるということがない。(笑) 日本人がそうだ。戦争に負けて、1億総ざんげしたけれども、一向改めやしない。これは、どうせ問題を起こすに決まっているといっている、戦争最後のころのあれで……。そういわれればそうだね。悔いるけれども、改めない。悔い改めることはしない。仏教批判、日本批判で、そういうことをいっている。

泉 先生が、もう1人、ものすごく親しくお付き合いして、尊敬といいますか、お互いに尊敬されておった見田石介先生、方法論研究会で一緒にやられておったというのはお伺いしているわけですがけれども、親しくされるよ

うになったきっかけとか、という点を評価されて
いらっしゃるのか。

大橋 見田さんは、宗教哲学なんだ。波多野精一の弟子
だ。だから、宗教学関係、宗教哲学関係に詳しい。そう
いう点で話が合うんだな。

川口 幾つぐらいからのおつき合いですか。

大橋 戦後、こっちに来て、方法論研究会やってからだ。
民科のあれもやっていたんだから、もっと向こうでもつ
き合っているはずだけれども、向こうでは知らなかった
な。

吉田 方法論研究会は、いつごろから始まったんですか。
例の岩崎さんの本を読んだのは、ずっと後ですか。

野村 野沢君が大学院に入ったころですね。

野沢 京大では、先生と吉村達次先生と私、市大の見田
さん、林直道さん、一ノ瀬秀文さん、梅川勉さん、佐藤
金三郎さん。

大橋 経統研とわりあいに関係があったんだ。

野村 見田さんは僕より古いですよ。前から市大におら
れた。

大橋 それでヘーゲルだからね。大体、どっちもヘーゲ
ルに興味を持っていた。僕は勉強しなかったけれども、
見田さんは詳しいからね。いろんな意見がずいぶん参考
になった。

泉 僕は、山田盛太郎の講義によく連れて行っていただ
いたのと、見田先生なんか、ヘーゲルについてよくお話
しいただいたのと、それがものすごく学部から大学院に
かけて印象に残っているんです。

川口 吉村先生がおせくなりになって、方法論研究会で

追悼も兼ねて研究会があつて、僕と泉君と連れて行って
もらったのを覚えています。

野沢 北野茶寮。

川口 たしか抽象的なことで、西野勉さんに食いついて
いたような記憶がある。あれは吉村さんの意見と違ふと
いって。(笑)

大橋 北野茶寮では、坂寄君だの、昭和16年の事件のと
きの人がみんなで10人ぐらい集まって話したテープがあ
るんだ。それが、昭和16年事件の当事者側の一番直接の
資料だと思ふんだけれども、それは全然京都の運動の中
に出てこないね。これが外に出てないから、もうその前
に京都の学生運動は立ち消えになっているみたいな説に
なっているけれども、それは北野茶寮でそういう会があ
つて、みんな集まって、テープはとられているわけなん
だ。

浦田 その事件で大橋先生が退職をされたということは、
当時のジャーナリズムは取り上げなかったのですか。

大橋 取り上げない。もう全然取り上げない。

川口 吉村達次先生とは、先生が助手のころからお知り
合いですか。

大橋 坂寄君だの竹田恒男君、そういうのはみんな学生
だった、蜷川研究室の。

吉田 産業組合研究会。

野村 先生の助手のころは、何人おられましたか。

大橋 僕と河野健二さんと深瀬君という薬屋の息子、い
ま近大にいますかな。

泉 その後。

大橋 その後知らぬ。もう退職して、東京に行っちゃっ

た。

野沢 堀江英一さんなどは、そのあたりか、先生の後で
しょうか。

大橋 そうだろうね。

野村 甲南の学長の杉原四郎さんも……。

吉田 堀江邑一さんは前だった。

大橋 戦争中、講師だった。

吉田 この前、産業組合研究会の名簿持っている人がい
ましたが、もしあれだったら、コピーしてきましようか。

大橋 コピー要るな。あのころの証研の名簿とかあった
んだけど、皆整理しちゃって、どこかにいっちゃっ
た。家も整理すると、いろんな資料出てくるはずだけれ
ども、なかなか整理できない。

大体本は、花園大学にみんなあげちゃおうと思ってい
るんだ。それで、民俗学関係のやつ、西北書店がくれた
から、それをみんな一緒にして、大したものはないけれ
ども、それでも一応、小島勝治の文庫もある。京大へ入
れるというのはなかなかめんどうだ。何か論議があって、
だから、全部花園に入れちゃって、あとは仏教大学に…
…。

吉田 まとめておいていただけるわけですね、大橋文庫
という形で。それを条件にやっていただいて。

大橋 目録をつくれというけれども、人を雇って目録を
つくるのも……。

野村 寄贈を受けるところがつくるのが礼儀でしょう。

大橋 あまり目録づくりにお金かけるのやめようと思っ
て、整理だけしておく。

吉田 2つ条件をつけて、1つは、まとめて保管するこ

と、2つは、目録をたくさんつくって、文庫目録が使えるようにしておく。2つ、寄贈していくとき条件をつけていただけませんか。

大橋 あそこは、社会福祉の本がまるでないんだ。それを一応整理して、欠本になっているのは買い足して入れておこうと思っている。

野村 それでは次の問題で、外国へいらっしゃいましたね。日本の社会と外国の社会との違いの一番強く感じになったところは、どういうところでしょう。

大橋 あまり大して変わりばえしないけれども、あれはもうちょっと早く、若いうちに行けばよかった。年取っちゃうと、疲れちゃって、あまり活動ができないけれども、それでも、僕たち行って、社会福祉関係は普通の人よりうんと見たな。福祉関係だけ別行動で、大体見て歩いた、イタリーにしてもオランダにしても。それで、日本の場合、ずいぶんそういう点では福祉関係は悪いというか、おくられているというか、そういうことを痛感したな。

ただ、ソビエトの場合は、かなりおくられているんじゃないかと思うんだな。(笑) ソビエトはあまり見れなかったけれども、運転手が道間違ったことにして、わざわざ連れていってくれた。そういう形じゃないと、あらかじめ許可を受けてないと、間違っただけで、行っただけで、ぐあい悪いんだ。(笑)

五十嵐 北欧の方はどうなんですか、見られたんですか。

大橋 北欧はいいな。スウェーデン、デンマーク。デンマークは、非常に物的には悪いけれども、組織的にデン

マークの精薄施設は一番感心したな。

野村 イギリスもいいんでしょう。

大橋 イギリスは、どこへ行ったかな。盲学校だの、そういう施設を見てきた。とにかく日本よりはずっといいよね、イギリスでも北欧でも。

木下 やっぱりそういうところに、障害者に対する思想みたいなものがある。宗教との絡みでも、そういうふうにお感じですか。

大橋 そうですね。やっぱり、宗教がかなり違うんじゃないかな、日本の場合と向こうでは。日本の場合、どうしても考え方が非常に封建的だよ。差別意識がすごいよ。

吉田 バチが当たったとか。

大橋 向こうは、その点がやっぱりキリスト教の場合、違うんじゃないか。

吉田 レプラを天刑病といったり。

大橋 それは、原罪という考え方をみんなかなり強く持っている。意識における原罪というか、そういう意識をいいにしろ悪いにしろ持っている。その点では、人間は同じレベルで見る点があると思うけれども、日本じゃそういう見方がダメですね。みんな平等だけれども、その平等が非常に薄っぺらなんだよな。それは、民族がわりあいに単純だからだろうね。朝鮮人問題、民族問題というのは、日本じゃなかなかだけれども、向こうじゃそれがもっと厳しく出るからね。そんな感じだったね。

とにかく日本の場合、あまり障害者に対してすぐれているとは思わないな。そこへいくと、東大の呉さんの精神医学というか、ずいぶん早期にああいう調査をやっ

ているね。大学院の学生が、社会調査も、休みに写真と記録をとったんですわ。十何件しか件数ないけれども、すごいりっぱなものだ^がと思うな、明治の初期にああいうことをやっているのは。

野村 ちょっと話は戻りますけれども、高野岩三郎について、どういうふうにお考えですか。ご本に書かれていることは読んだとしましても、彼は実践家としてもかなり能力があつたし、仕事もありましたね。特に、社会問題についての関心の先駆性とか、そういう点から見て、どういうふうにお考えですか。

大橋 高野さんは、そういう点では大ぜい育てているし、東大の経済学部だの、社会学部だの、大原社研だの。

野村 直接の面識はございませんか。

大橋 大原社研の人たちを通してだね、大内さんだの、あそこの図書室の連中。後に朝日新聞に入った木村定さん、あれも図書室にいた人だね、大原の。

野村 大原は、戦後だったんですか。戦前の大原にいらっしゃったことございますか。

大橋 行ったことない。図書館には行ったことある。倉庫みたいなところに入ったことがある。

野村 戦後ですか、戦前ですか。

大橋 あれは戦前だな。

野村 研究所が空襲で焼けてないときですね。研究所にいらっしゃったことは……。

大橋 いや、研究所には行ったことない。

野村 研究所の裏側に倉庫がある。

大橋 倉庫に直接行った。だれが案内してくれたかな。

野村 それでは最後に、吉田さん、さっきお願いしてお
った質問を差し上げてください。

吉田 結婚をして、家庭を持たれた前後のお話をひとつ
お願いします。

大橋 昭和17年だったかな。越智さんという方が仲人な
んだ。女房のいところに矢野幹夫という人がいて、それが
左翼なんだな。そういう関係が主だろうな。

夫人 私と結婚したわけ……？（笑）

吉田 何か奥様が大変よいおうちの出で、お寺さんの息
子さんが左傾してしまったので、思想を直そうというん
で、しっかりした娘さんを奥さんにして、思想善導の…
…。（笑）

大橋 思想を善導しようと思って……。

吉田 と親戚で考えて、非常によい家のしっかりしたお
嬢さんを、お国では困った子にめあわせたというような
ことをちらっと聞いたんですが。これは奥様から聞いた
方がいいですかね。

大橋 まあ、そういうことになるかな。（笑）

吉田 京大をおやめになる直前ですか。

夫人 17年です。

大橋 クビになってからです。よくまあクビになったと
ころに来たもんだと思って。華頂の教師やっていたとき
だからね。

夫人 主人のあれでは食べられないと思って、私の就職
口を探してくださいと頼んだら、蜷川さんに怒られて、
女房を働かせるなんてもってのほかだって。

野村 矛盾したことをいってる。

夫人 それで、私は就職口は探さないで来たんです、そのころの強制貯金に400円持って。70円の月給で2年働いて、25%強制貯金させられた。

川口 そのころ奥様は女学校の先生だったんですか。

夫人 桑名の女学校、義務制で。

川口 京都では結局働かずに……？

夫人 何もせず。

川口 東京へ出てから……。

夫人 終戦後です。戦争中は、そのときやめたきりです。

吉田 数学の先生、正規分布……？

大橋 年金は僕よりいいんだよ。(笑)

吉田 先生のは途中が切れますからね。

野村 助手というのは、昔の帝国大学でもいろいろな点で大分不利だったんですか。

大橋 文部教官だから、講師よりは身分はちゃんとしていたんだ。

野村 いまでも助手は文部教官ですか。

大橋 いまでもそうだろう。講師は学長の任命だよ。

浦田 いまでもそれは残っていますね。

大橋 身分的には、助手の方が安定しているんだね。

浦田 形式的には残っている。講師というのはほとんどなくなりました。けれども、講師として発令するときには、学長発令で済むのです。助手は最近早いようですよ。

野沢 奥様が盲学校へ勤められたのは……？

夫人 24年。

川口 こちらに来られたときに……？

大橋 こっちに来て、食っていけなかったんだよな。

夫人 こっちに来たときは、あの時分まだお芋が入った

ご飯炊いたり、それから、たはこの配給とかビール配給、そんなのがありました。そのころで、こっちに来たら、知っている人はいないし、借金するところもないし、主人の給料ではおぼつかなくて、「8000万人」に書いた原稿料で引越したんですよ。

吉田　すごいですね。

夫人　そのとき2万円でした。あのときの2万円は大したものでしたね。

吉田　すごい原稿料ですね。これは記録にとどめておかないとね。(笑)

大橋　いまの船舶振興会の笹川の子分に市川の家を追いつて、立ち退きになって、荷物たたき出すというんで、これはちょうどいいと思って、そのお金で京都へ引越した。

夫人　荷物だけ先に送って、体が悪いから、私が家を探してきて、堀江英一先生を訪ねて、ずうっと上賀茂の方を訪ねて家探ししたけれども、ありませんで、また智積院に戻って、もとのところで、この建物が智積院の中の異寮。結婚したときもここに入っていたんです。それで、とうとうなくて、そのときはすぐここに入らないで、智積院の門のすぐ横にあった建物に入ったんです。

野村　寮ですね。

夫人　寮みたいなところですね。

浦田　先生が原稿書いておられるときに、奥さんが憲太郎君を抱いて、やかましくないように夜外に出ておられたという話をちょっと伺ったことがある。それは、そういう時代ですか。

夫人　東京のときもそうですね。原稿書くといったら、

どこかに行っちゃう。いなくなつて、どこに行つたのか、尾住さんのところに行つて書いていたり……。

大橋 「8000万人」だの、いまの生活保護法のあれだの、市川で書いた。「飢餓線上の生活実態」は、会社をやめたばかりで、資料もなくて、原稿料稼ぎだ。

野沢 しかし、いまでこそ共働きは多いですけども、そのころの共働きは、本当に共働き第1号でしょう。

夫人 24年くらいですか。そんなでもないですよ。戦後ですからね。

川口 保育所なんかないころでしょう。

野沢 ないない。全然ない。

夫人 保育所がないし、いまの2番目の子が生まれたとき、女子大が隣だったので、女子大の2部の学生さんに昼間来てもらってお守りしてもらった。あとは年寄りがときどき来てくれたり、お守りの人を頼んだ。人が次々かわりましたから、子供が人の顔色をうかがうような子になって困りました。保育所は全然ないですから、手伝いの者が都合が悪くなってやめなければならないという、一番困っちゃって。25年かしばらくは、ちょうど非常に結核が悪くなって、とにかく大変でございました。

吉田 結核は、最初に発病されたのはいつですか。

大橋 戦争中だね。

夫人 こっちから行ってすぐです、18年。

木下 出獄されてすぐでしょう。

大橋 ブタ箱出てきて、松田道雄さんが、これはぐあい悪いやといい出して、東京に行つて、市川に医者があつたんだ。セファランチン——ちょうど「世界」の10月号に「2つの同時代史」というのが載っている。あれに出

てくるんだ、セファランチンの療法が。埴谷と大岡昇平が座談会をやっている。あの連中も結核なんだね。

川口 埴谷雄高と大岡昇平の対談ですね。

大橋 これに大体そのころのことが非常によく書いてある、戦争に負けるころのことが。この連中には、戦争負けることわかっているんだ。外務省に行って、無線の傍受をちゃんとやって、日本で一番新しい情報はわれわれが知っているといはっているけれども、そうだろうな。これは、敗戦のころがすいぶんよく書いているなと思って。1月からずっと連載だろう。

それから、そのころのころでは、永井荷風が日記ずっと書いているんだね。すごいな、よく書いているなと思って。「断腸亭日乗(六)」、これも後から岩波で編集したものだろうが、よく書いている。こういうのは、戦争中のためにも足しになるね。

川口 先生のご病気のことも前にちょっとお聞きしたんですが、25年に発病して、休職のことで、すいぶん事務局からいじめられたということをお聞きしましたか。

大橋 ああいうむちゃくちゃなことを京大のやつがやるということは、考えられないことだね。

吉田 休職を退職に切りかえるという形の圧力があったんですね。

夫人 もう何日かしたらクビですよといいに来た、病院に入院しているときに事務局が。

大橋 それは、診察した一番前のときから数えるんだっていうんだ。途中で講義していたり、ずっとしていたのは認められないというんだ。休職命令出ているから、そのときから計算するんだって。

夫人 はかまで着物持って、病院に来るタクシーの中で着物着がえて……。

大橋 ああいうむちゃくちゃなことを教授会や評議会で決めたんじゃないだろうと思う。あんな圧力かける学部ってあるかなと思った。

吉田 教授会の議題にはなならないかもしれませんが、学部長の一存がかなり入る。学部長と事務長レベルで。

大橋 こっちはちょうど、事務長が相良惟一さんだった。文部省の方に、岡野さんという学術局審議官の友達がいいた。こいつに聞いたら、そんなおちゃくちゃなことおかしいぞというし、相良もこれはでたらめだよというから、文部省の方からひっくり返させた。ああいうことをやるんだ。心臓が弱くて、友達がいなかったら、通されちゃう、クビになっちゃう。

夫人 組合が頼りなかった。

大橋 そうそう、組合が全然頼りにならない。給料がほかに比べると2〜3万違うんだ。2万ぐらい違うんだ。低いんだ。戦時中の不合理是正やらないかといったんだ。

組合は、先生方のことをやるんじゃなくて、小使いさんのことをやるんだっていうんだ。用務員さんのことをやるんで、先生方のことは知らぬといいやがる。

結局、あのころ60歳を63歳にするという定年延長があったね。滝川幸辰さん（総長）のところにその文句つけに行ったら、それが問題なんだね。結局、生意気なやつが来た、クビにしちゃえというんだ。

浦田 あの当時、先生は組合が何かをやっておられたんですか、その異議申し立ては……。

大橋 頼まれて、こいつをまた堀江君たちがあんた行っ

	てくれというから、オレひょっと引き受けて行ったんだ。
	(笑)
川口	あのころ、堀江さんや松井清さんは、若くて威勢がよかったのでしょう。
野沢	講師、助教授のころだもんな。
木下	私が、初めてか2度目ぐらいにここにお邪魔したとき、いつも奥さんがおられないわけ。先生はすしをとっていましたけれども、あのころやっぱり、先生も何かいないのが不満みたいな、(笑) そういう感じを受けまして、共働きという問題では、そういうことが重なってあると思うんですけれども、社会的活動が忙し過ぎて、われわれも勉強できないという、ちょっとぐちめいたことをよくお聞きしましたが、いまはもうそういうことはお考えにならないと思うんですけれども……。(笑)
大橋	いや、自分の生活は自分でやっている。メシは当てにしていない。女房当てにならない。(笑) そういう点じゃ、オレのところは能率は悪いと思うな。自分で一切やっているからね、食事しているからね。
浦田	ああいうふうには戦前派は考える。(笑)
大橋	それだから、一人で働いて、1人の給料でやっていくのもいいけれども、女房が一所懸命やって、2人で働いているんだから、まあ少しぐらい不便でもしようがないなと思った。こっちが能力があって、うんと稼げればいいけれども、そうはいかぬからね。
夫人	むだ違いするんですね。そっちの方が多いんですよ。(笑)
野沢	みんな本に化ける。
吉田	レッドパージで京都へ来た鈴木稔さんが、よく京

都の左翼はみんな奥さん連中が養っているんじゃないか
 といってました。(笑)

大橋 戦前もそうなんだ。京都の左翼は、奥さんがみん
 な水商売、カフェーに働きに行っ、亭主の運動を支え
 ている。これは、戦前の京都の民主運動を語る会の連中
 皆それ。戦前はみんなそうだったね。

木下 その伝統を脈々とわれわれが……。 (笑)

夫人 申しわけございません。

野村 どうも長時間いろいろとありがとうございました。
 私ども初めて聞いたお話がいろいろあるし、繰り返し聞
 いたことは大事なことであったということもよくわかり
 ました。

後輩として、これからいろいろ先生に負けないように
 やっていきたいと思いますが、長生きしていただいて――
 つい先日、私よりご飯をたくさんお上がりになってびっ
 くりした記憶が生々しいのですが、ひとつどうぞよろし
 くご指導をお願いしたいと思います。

きょうは5時間以上、すいぶんいろいろなお話をして
 いただいて、またわれわれそれをいろいろな機会に思い
 出し、かみしめていきたいと思います。私たち次の世代
 ですから、そういうことをまたいろいろお話しする機会
 があると思います。どうもありがとうございました。